平成30年度
文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

幼稚園教育への円滑な接続の観点から行う子育て支援としての２歳児の受入れに関する調査研究

―２歳児の発達の特性を踏まえた受入れの現状と課題―

平成31年３月

公益社団法人 全国幼児教育研究協会

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、<公益社団法人 全国幼児教育研究協会>が実施した平成30年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

目　　次

Ⅰ　研究の目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ　研究の内容及び方法等 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　１　研究主題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　２　研究の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　（1）調査研究１　質問紙調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　（2）調査研究２　訪問調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　３　研究の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅲ　結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　１　調査研究１　質問紙調査に基づく研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　（1）質問紙調査の結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　（2）質問紙調査結果のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　２　調査研究２　訪問調査に基づく研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　（1）訪問調査協力園一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
　（2）訪問調査協力園による２歳児受入れの状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・30
　（3）訪問調査協力園における指導計画や記録の様式と記載内容例 ・・・・・・・・40
　　①　指導計画と保育の記録の様式と記載内容例 ・・・・・・・・・・・・・・・40
　　②　個人記録の様式と記載内容例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　（4）連絡帳の記録を基に、保護者との連携の在り方を考える試み ・・・・・・・・45
　（5）訪問調査のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
Ⅳ　研究の成果と課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　１　成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
　２　今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
　３　おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　質問紙調査用紙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
付記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

幼稚園教育への円滑な接続の観点から行う子育て支援としての2歳児の受入れに関する調査研究
―2歳児の発達の特性を踏まえた受入れの現状と課題―

Ⅰ　研究の目的

近年、保護者の就労状況の変化や幼児期の教育に対するニーズの多様化により、幼稚園における2歳児の受入れの需要が高まっている。また、待機児童の解消に向け、各自治体が実態に即して保育所の増設や認定こども園への移行等を推進している中、平成29年に「子育て安心プラン」[註1)]が策定され、2歳児の受入れについて一層推進することが求められた。これを受けて、各自治体において社会の変化に応じた子育てに関する様々な施策が工夫されているが、これらの施策は、真に子供の育ちを保障するものでなければならない。とりわけ、幼児期の教育は、人格形成の基礎を培う重要なものであるので、幼稚園における子育て支援としての2歳児の受入れは、2歳児特有の発達に配慮し、その成果を3歳児以降の幼稚園教育に円滑につなげていくことが大切であると考える。

各園ではこれまでも、預かり保育を長時間化・通年化すること等により拡大してきており、待機児童解消の一役を担ってきている。また、文部科学省が発出した「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年通知）[註2)]を受けて、2歳児の受入れについては様々な創意工夫を行ってきているが、今なお、1・2歳児の待機児童問題は解消せず、課題となっている。そこで、幼稚園における2歳児の受入れについて、一層推進することとなり、その具体的な方策として、「一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）」が示された。この施策は、待機児童の受入れ推進を目的とした事業であるが、ここで求められる役割は、保護者の就労支援だけでなく子育て支援でもある。特に現代は、子育ての方法が分からず不安を抱いている保護者も多い。例えば、「身近に子供の群れ遊びができる場所」や「遊びの仲間」が見い出せず、子供と保護者が1対1で過ごす時間が長く、子育てに負担を感じている保護者も増えている。こうした課題に対応し、家庭の教育力の再生・向上を図る役割も生まれている。

今、教育現場の幼稚園では「プレ保育」「2歳児教室」など、名称は様々であるが、各園の判断で行われている2歳児の受入れは、どのような体制で行われ、どのような成果を上げているのであろうか。前掲の「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年通知）は、「構造改革特別区域法の一部を改正する法律」（平成19年法

註1)　子育て安心プラン（平成29年）内閣府
https://www.kantei.go.jp/jp/headline/taikijido/pdf/plan1.pdf
註2)　幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について（平成19年通知）文科省
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/08080813/002.htm

律第14号）の公布に関する通知であるが、この中では、「満2歳に達した日の翌日以降における最初の学年の初めからの幼稚園での受入れについては、今後は、幼稚園児として受け入れ集団的な教育を行うことではなく、幼稚園の人的・物的環境を適切に活用し、個別の関わりに重点を置いた子育て支援としての受入れという形態に変更する」こととしている。さらに、その通知の別添2の資料には、基本的な考え方として、「2歳児特有の発達を踏まえた受入れに配慮し、その成果を3歳児以降の幼稚園教育に円滑につなげていくことが大切である」としている。この取組が充実し、真に2歳児にとってふさわしい環境を用意し、一人一人に応じた保育を実現させる子育て支援や幼稚園における受入れの在り方について検討することが喫緊の課題と考える。

そこで、本研究では、幼稚園における子育て支援としての2歳児の受入れについて調査研究を行い、全国の各幼稚園がどのような体制でどのような保育の内容・方法で2歳児受入れを行っているのか現状と課題を把握し、それに基づいて幼稚園教育への円滑な接続の観点から2歳児受入れの在り方について提言することで、幼児期の教育内容等の深化・充実に資することを目的とし、この研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の内容及び方法等

1　研究主題

幼児期の教育は人格形成の基礎を培う重要なものである。その基本を維持しつつ、幼稚園における子育て支援としての2歳児の受入れを質の高い実践とすることが重要である。そのために、実際の具体的な受入れ体制や実施上の配慮点等の現状を把握するとともに、3歳児以降の幼稚園教育との円滑な接続に関する具体的な方策を明らかにすることが喫緊の課題となっている。そのことを踏まえ、幼稚園における教育の中で「質の高さ」を維持し、確かな「円滑な接続」につながる2歳児の保育の方法を明らかにすることを目的とし、研究主題を「幼稚園教育への円滑な接続の観点から行う子育て支援としての2歳児の受入れに関する調査研究―2歳児の発達の特性を踏まえた受入れの現状と課題―」と設定した。

本研究において使用する用語については、以下のように定義して表記することとしている。

「2歳児の受入れ」とは

文部科学省が発出した「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年通知）に基づき、「満2歳に達した日の翌日以降における最初の学年の初めからの幼稚園での受入れについては、今後は、幼稚園児として受入れ集団的な教育を行うことではなく、幼稚園の人的・物的環境を適切に活用し、個別の関わりに重点を置いた子育て支援としての受入れという形態」としている。但し、平成30年度より施行されている、待機児童対策として保育を必要とする子供（3号）を受け入れる「一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）」を実施している幼稚園においては、満2歳以上の幼児の受入れを含むこととする。

「2歳児保育」とは

本来、幼稚園においては、学校教育法第26条に「幼稚園に入園することのできる者は、満3歳から、小学校就学の始期に達するまでの幼児とする」と規定されているように、2歳児の入園は認められていないため、「2歳児の受入れ」という表現にしている。受け入れた2歳児への対応について、幼稚園教育における保育と混同する恐れもあるが、保育者が2歳児の発達や心身の状況を十分捉えながら、心地よく安心して過ごせる環境を用意して一人一人に対応していることから、保育に関する内容について述べる文脈の中では、「2歳児保育」と表記する。

「一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）」とは

政府の「子育て安心プラン」に基づき、幼稚園における2歳児の迅速な受入れを推進するために平成30年度より始められた制度である。事業の実施主体は「子育て安心プラン」に参加する市区町村で実施場所は幼稚園である。この対象児は、3号認定を受けた2歳児であり、対象は誕生日を迎えた時点から随時受け入れることや、当該2歳児が3歳の誕生日を迎えた年度末まで継続して受け入れることは妨げないものである。保育内容は、保育所保育指針等や「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について」（平成19年通知）を踏まえ、2歳児の発達段階上の特性を踏まえたものとなるよう留意することが求められている。

2　研究の方法

本研究では、質問紙調査を用いて、全国の幼稚園において、どのような内容でどの程度行われているか、2歳児受入れはどのような体制で、どのような保育がどの程度行われているかを検討した。また、訪問調査協力園（10園）において、保育を観察した上で、具体的な保育の考え方や運営等に関する聴取を行い、様々な保育の形態、具体的な保育内容、方法及び幼稚園における2歳児の生活について考察した。

この二つの調査から得られた現状と課題を明らかにし、その成果から2歳児の発達を踏まえた受入れ（保育の内容・方法)、環境の構成、留意点、子育て支援の在り方等について考察し、3歳児以降の幼稚園教育との円滑な接続に関する具体的な方策について提言することとした。

また、保護者との連携等の実態についても二つの調査に基づき、子育てに関する保護者との連携の在り方を考察し提言することとした。

（1）調査研究1　質問紙調査

質問紙調査は、全国の幼稚園における「2歳児受入れ」の体制や保育及び子育て支援の実態を把握することを目的とし、以下のような方法で実施した。

〇調査の時期

平成30年9月中旬から10月上旬

〇調査対象園

系統抽出法により、全国の幼稚園の中から1,000園を抽出し、郵送法により実施した。

○調査の内容（詳細は資料 P60 ～ P63 参照）

・2 歳児受入れの体制や運営の実施状況（受入れ日数及び時間、保育室を含む環境構成、クラス等の編成と人数、2 歳児保育に従事する者、在園児との関わり等）。

・2 歳児保育の計画や記録の作成状況。

・2 歳児受入れで重視している内容及び成果と課題等。

・2 歳児受入れの必要性に関する意見及び実施上の課題。

・子育て支援の内容、保護者との連携。

（2）調査研究 2　訪問調査

訪問調査は、研究協力園を設定し、調査研究実行委員の中から 2 名が各園を訪問し、2 歳児がどのように園生活を行っているかを直接観察するとともに、2 歳児の受入れに関する様々な情報や具体的な資料を収集することを目的とした。

○調査の時期

平成 30 年 6 月から平成 31 年 1 月までの間に、各園 2 回。

○調査対象園

待機児童数が多い地域を中心として、プレ保育・2 歳児教室等を先行的に実践している幼稚園及び「一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）」を実施する幼稚園を本協会の全国に広がるネットワークを最大限に活用し、10 園を選定した。

○調査の内容

2 歳児が幼稚園で生活する姿を直接観察し、保育の内容や幼児の発達や育ちの状況を捉えるとともに、保育に関する資料を収集した。

観察で捉えた状況や気付いたこと等について、2 歳児の保育担当者や園長等から保育の方針や 2 歳児の捉え方等を聴取するとともに、以下の事柄について聴取した。

・2 歳児の受入れ（保育）の体制（保育日数、保育時間、クラス編成、保育者の配置、施設・設備など）。

・保育の内容・方法（2 歳児の生活や遊びの様子、環境の構成、保育の展開の工夫など）。

・2 歳児受入れ上の工夫や配慮点。

・家庭の教育力の再生・向上への効果。

3　研究の経過

研究計画に基づき、以下のとおり研究を推進した。

6月	第1回調査研究実行委員会　（研究の目的、方法の共通理解）	
	WG①～③	（調査の質問項目の検討、研究協力園の選定及び調査内容の確認）
7月	WG④⑤	（質問紙調査項目の内容検討、訪問調査の結果報告）
8月	WG⑥⑦	（質問紙調査項目の内容検討、訪問調査の結果報告及び記録用紙の様式決定）
	第2回調査研究実行委員会（質問紙調査項目の検討、訪問調査の報告）	
9月	WG⑧	（質問紙調査項目の決定、発送）
10月	WG⑨⑩	（訪問調査の報告及び今後の訪問調査の内容の検討）
		（質問紙調査の回収、データ入力）
11月	WG⑪	（質問紙調査結果の読み取り）
		（訪問調査結果の記録のまとめ方の検討）
12月	第3回調査研究実行委員会（質問紙調査結果の分析・考察、訪問調査の報告）	
	WG⑫	（質問紙調査結果の分析・考察、訪問調査の報告・検討）
	第4回調査研究実行委員会（質問紙調査結果の分析・考察、報告書案の検討）	
1月	WG⑬	（報告書案の内容検討、報告書案の作成）
		文部科学省への中間報告
2月	第5回調査研究実行委員会（報告書案の内容検討及び修正）	
	WG⑭⑮	（報告書案の最終確認、修正）
3月	WG⑯	報告書の印刷・校正
		文部科学省に報告書提出

Ⅲ　結果

1　調査研究 1　質問紙調査に基づく研究

（1）質問紙調査の結果

質問紙の問い（P60 から P63 参照）に沿って、データ処理をした。集計結果は以下の通りである。

1)　回答園

調査対象である国公私立幼稚園 1,000 園のうち、回答園は 593 園（59.3%）であった。
なお、各問いにおける回答園数（N）は、無回答等によって変動する。

2)　回答園の属性

①回答園の設置者

回答園の設置者の内訳は、表 1 の通りであった。

表 1　回答園の設置者（N ＝ 593）

		園数		%	
国立		12		2.0	
公立		245		41.3	
私立	私学助成園	325	163	54.8	27.5
	新制度園		82		13.8
	その他		80		13.5
無回答		11		1.9	
合計		593		100.0	

②回答園の学級数及び園児数

回答園の学級数及び園児数は、表 2 の通りであった。

表 2　回答園の学級数及び園児数

		満 3 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
学級数	N	135	450	549	559
	平均	1.3	2.1	1.8	1.9
	SD	0.7	1.2	0.9	0.9
園児数	N	196	458	555	564
	平均	11.7	41.1	42.5	45.4
	SD	13.5	28.5	28.8	28.7

注：SD は標準偏差を示す（以下同じ）。

3） 2歳児受入れ実施の有無

2歳児受入れを実施している園及びその設置者は、表3、4の通りであった。

表3　2歳児受入れの実施の有無（N ＝ 593）

	園数	%
実施している	161	27.2
実施していない	432	72.8
合計	593	100.0

表4　2歳児受入れ実施園の設置者（N ＝ 161）

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th colspan="2">園数</th><th colspan="2">%</th></tr>
<tr><td colspan="2">国立</td><td colspan="2">0</td><td colspan="2">0.0</td></tr>
<tr><td colspan="2">公立</td><td colspan="2">2</td><td colspan="2">1.2</td></tr>
<tr><td rowspan="3">私立</td><td>私学助成園</td><td rowspan="3">157</td><td>75</td><td rowspan="3">97.6</td><td>46.6</td></tr>
<tr><td>新制度園</td><td>36</td><td>22.4</td></tr>
<tr><td>その他</td><td>46</td><td>28.6</td></tr>
<tr><td colspan="2">無回答</td><td colspan="2">2</td><td colspan="2">1.2</td></tr>
<tr><td colspan="2">合計</td><td colspan="2">161</td><td colspan="2">100.0</td></tr>
</table>

4） 2歳児受入れの体制と運営

①受入れの目的

図1の通り、最も多い目的は、「幼稚園教育への円滑な接続」56.3% であった。以下「保護者の育児不安解消のための子育て支援」17.1%、「2歳児に必要な体験の提供」16.5% と続いた。「家庭の教育力向上」は 0.0% であった。

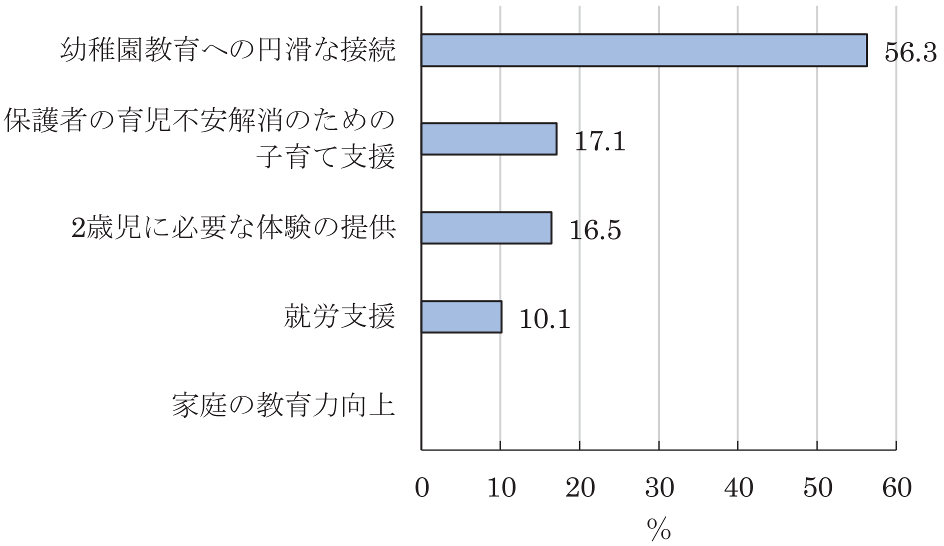

図1　2歳児受入れの目的（N=158）

②受入れ総人数とクラス数

図 2 は、各園が受け入れている 2 歳児の総人数の分布を示したものである。最小値は 2 人、最大値は 90 人であり、平均 24.5 人（SD18.7）であった。

また、図 3 は、各園の 2 歳児のクラス数の分布を示したものである。最大値は 8 クラスであり、平均 1.8 クラス（SD1.2）であった。両結果から算出すると、1 クラス(グループ)当たりの平均人数は 13.8 人（SD7.1）であった。

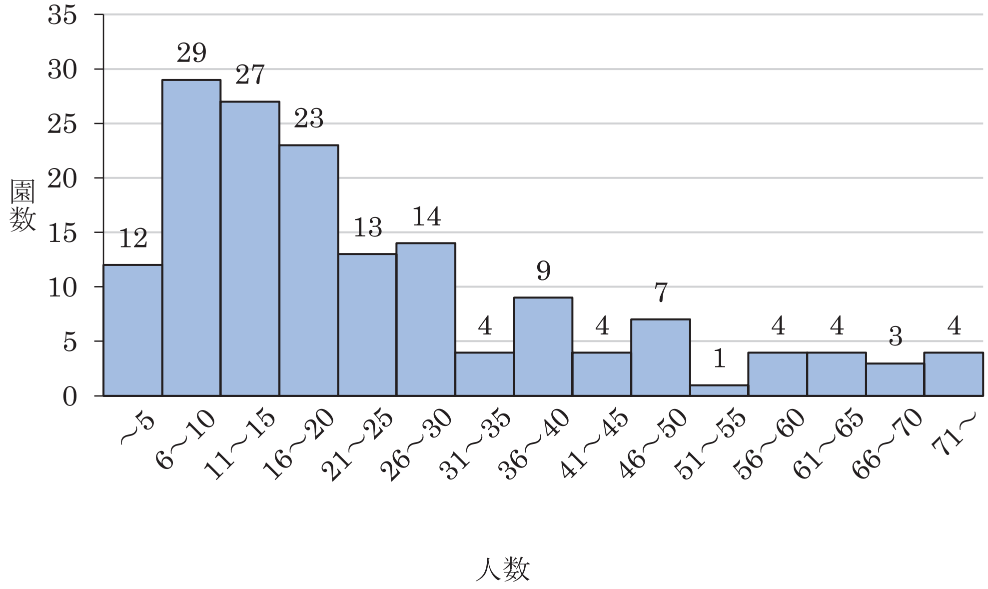

図 2　受入れ総人数の分布（N＝ 161）

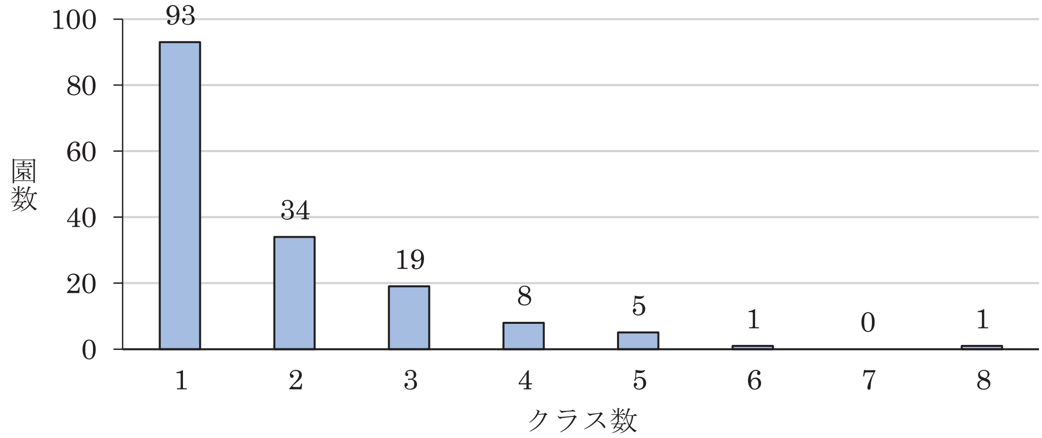

図 3　クラス数の分布（N＝ 161）

③保育実施日数及び保育時間

図 4 は、1 週当たりの保育実施日数別の園数と平均保育時間を示したものである。保育実施日数の平均は 3.8 日（SD1.7）で、保育時間の平均は 4.1 時間（SD2.0）であった。

保育実施日数が 5 日と 6 日の園では、平均保育時間が 5.0 時間、6.8 時間であった。一方、保育実施日数が 0.5 日から 4 日の園では、平均保育時間は、1.8 時間から 3.3 時間であった。

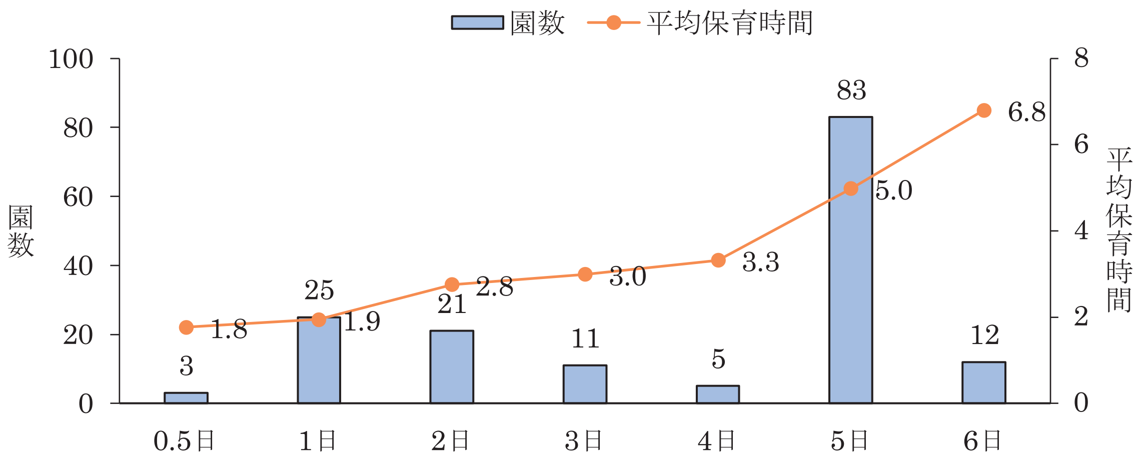

図 4　1 週当たりの保育実施日数別の園数及び平均保育時間（N ＝ 160）

表 5 は保育実施日数と一人の幼児が週何日通園しているかを表す通園日数の関係を示したものである。

週に 0.5 日（2 週間に 1 日）実施する園と、1 日実施する園は、保育実施日数と通園日数は一致した。保育実施日数が 0.5 日の園は 3 園、1 日の園は 25 園であった。

一方、保育実施日数が 2 日以上の園では、保育実施日数と通園日数が一致しない場合もあった。3 日保育を実施する園の場合、一人の幼児が 3 日全て通園するのは 7 園であり、1 日のみ通園する園は 2 園であり、2 日通園する園は 1 園であった。5 日保育を実施する園では、5 日全て通園する園は 75 園であり、4 日通園する園は 1 園、2 日通園する園は 3 園、1 日のみ通園する園は 3 園であった。

表 5　保育実施日数と通園日数（N ＝ 157）

		通園日数						
		0.5	1	2	3	4	5	6
保育実施日数	0.5	3						
	1		25					
	2		4	17				
	3		2	1	7			
	4		1		1	3		
	5		3	3		1	75	
	6			1			4	6

表 5 の水色の網掛け部分の 85 園は、1 週間ほぼ毎日通園していることになる。こうした園とそれ以外の園では保育内容に差異が表れることが予想される。

そこで、通園日数が 5 日と 6 日の水色の網掛け部分の 85 園を「通常型」とし、通園日数が 4 日以下の 72 園を「特別型」とした。以降の質問項目について、必要に応じ「通常型」と「特別型」の保育内容の比較を試みることにした。

④時間外保育の実施

時間外保育（いわゆる預かり保育と同じような形態）を実施している園は 98 園で、全体の 60.9%を占めた。

図 5 の通り、時間外保育の終了時刻で最も多いのは「18 時」の 26 園であった。次いで、「18 時 30 分」の 20 園、「19 時以降」の 19 園であった。

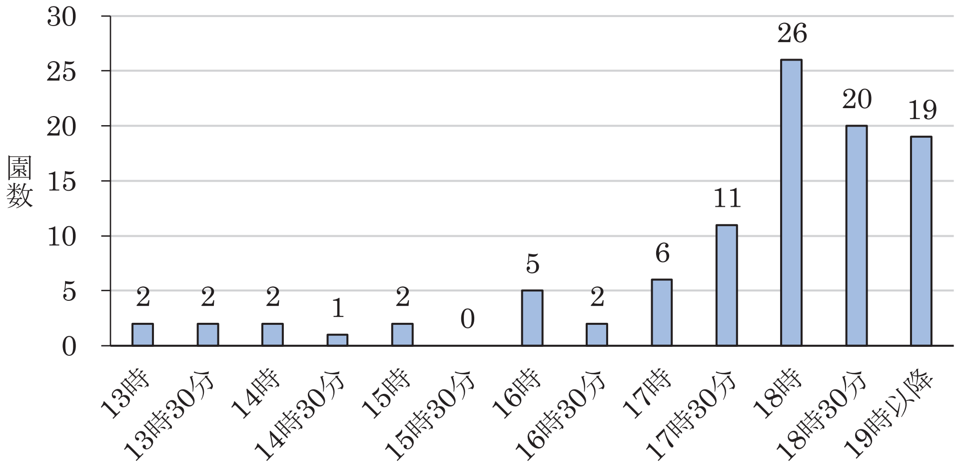

図 5　時間外保育の終了時間(N ＝ 98)

⑤担当職員数

図 6 は 1 クラス当たりの職員数を示したものである。1 クラス当たりの職員の平均値は 2.5 人（SD0.9）であった。

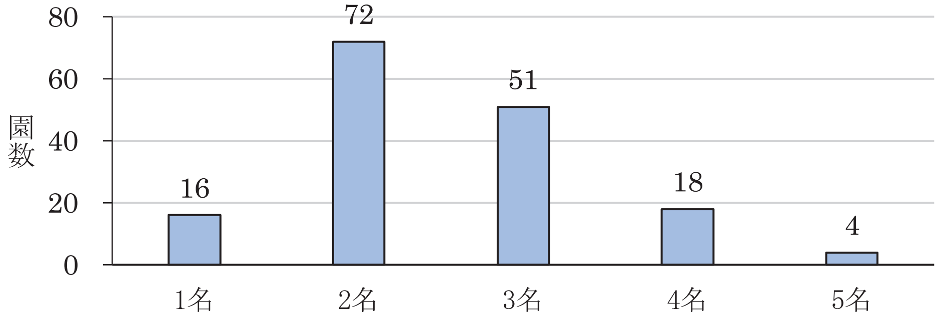

図 6　1 クラス当たりの職員数(N ＝ 161)

⑥担当制[註3]の有無と職員一人当たりの担当幼児数

表6の通り、担当制を取り入れている園は32園（19.9%）であった。

職員一人当たりの担当幼児数は、平均6.3人（SD3.8）であった。

表6　担当制の有無（N = 161）

	園数	%
担当制を取り入れている	32	19.9
担当制を取り入れていない	129	80.1
合計	161	100.0

⑦担当職員の免許・資格

図7の通り、「幼稚園教諭免許・保育士資格の両方をもっている職員」が78.5%と最も多い。

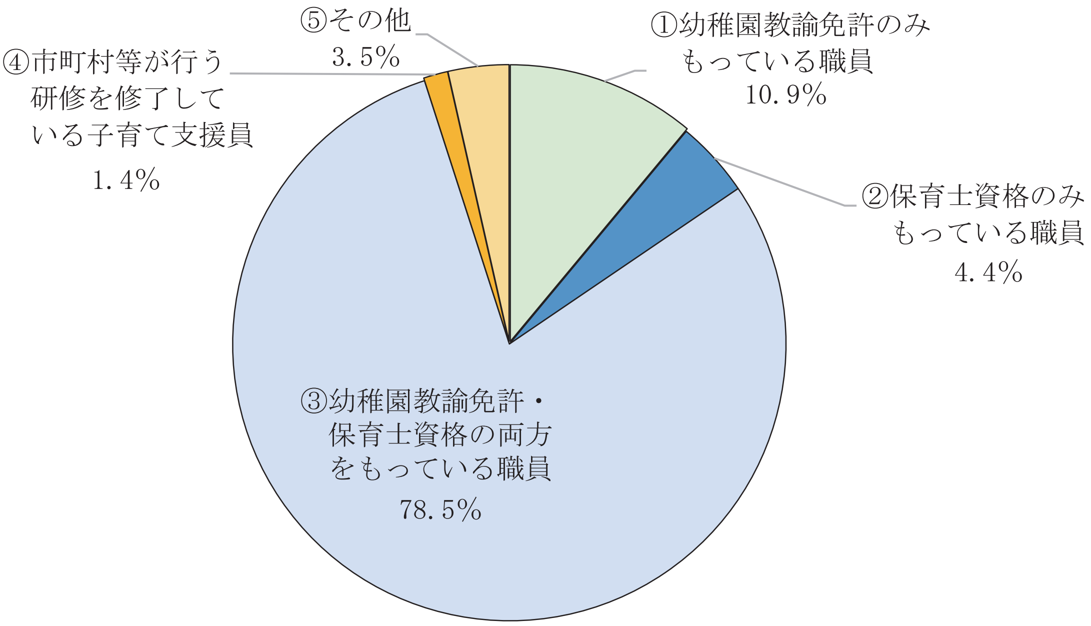

図7　2歳児クラス担当職員の免許・資格（N = 155）

⑧2歳児クラスからの3歳児学級への入園率

平成29年度の2歳児クラスから、平成30年度の3歳児学級に入園した幼児の割合を求めた。図8の通り、入園率が100%の園は67園（46.5%）が最も多く、80%以上は120園（83.3%）であった。

註3)　担当制とは、乳幼児にとって保育者は、情緒的な絆を築き愛着対象者となることが求められる。そのためには、一人の乳幼児に対して特定の保育者が、日常的に世話をしたり応答的に関わったりすることが必要となる。こうした保育体制を担当制という。

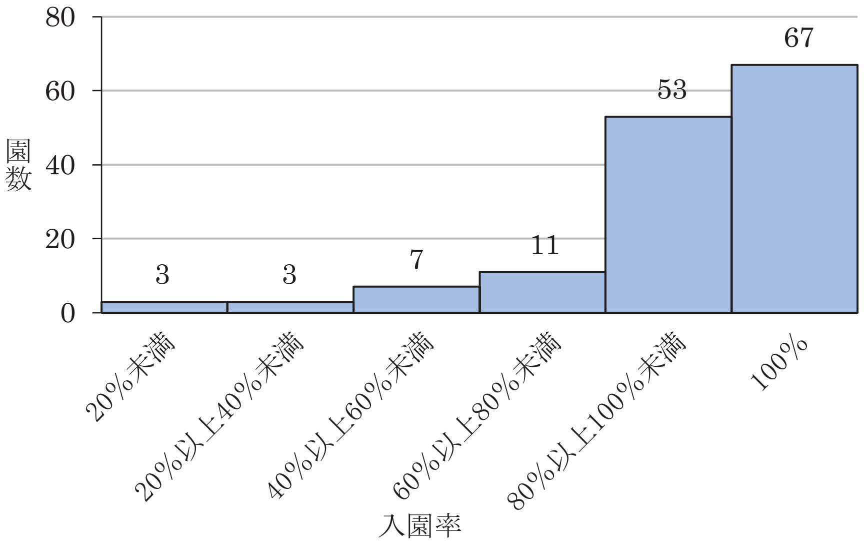

図 8　3 歳児学級への入園率の分布（N=144）

⑨ 2 歳児専用に用意している場やもの

図 9 の通り、最も多いものは「保育室」の 87.0% であった。以下「机」85.7％、「椅子」85.1% の備品であった。「砂場」13.7%、「園庭」12.4% は下位であった。

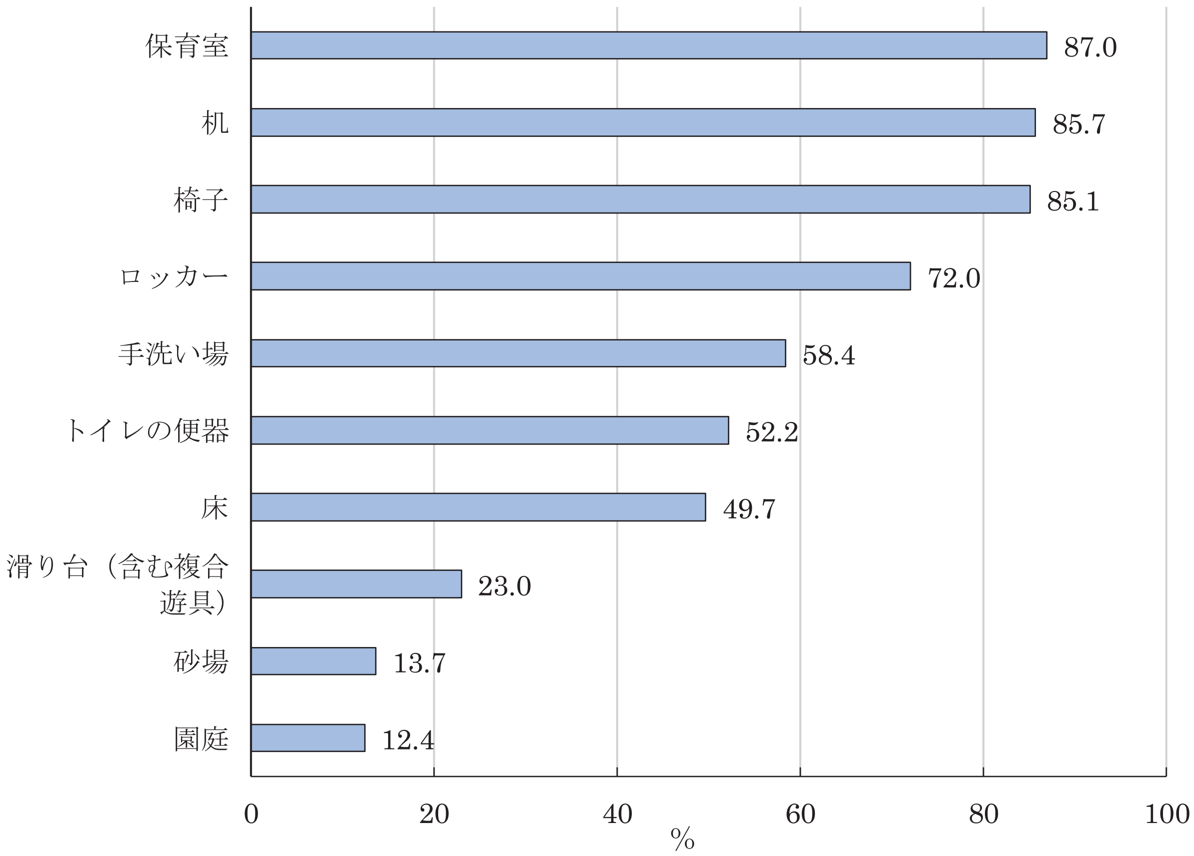

図 9　専用に用意している場やもの（N ＝ 161）

5）　2 歳児の保育の計画及び内容

①保育の計画や記録の作成

表 7 の通り、「日案（週案）」を作成している園が 89.4% であった。「年間指導計画」は 80.1% 作成され、「個人記録」の作成は 75.8% であった。

表 7　保育の計画や記録の作成（N ＝ 161）

	有（%）
年間指導計画	80.1
日案（週案）	89.4
計画に基づいた保育の記録	82.6
個人記録	75.8

「通常型」と「特別型」との比較をした結果、表 8 の通りであった。「計画に基づいた保育の記録」以外は、「通常型」が有意に高かった。

表 8　保育の計画や記録の作成（上段：選択された数 / 下段：全体に占める率）

		通常型 N ＝ 85	特別型 N ＝ 72	検定結果 （Fisher の直接法）
年間指導計画	度数	76	49	**
	%	89.4	68.1	
日案（週案）	度数	80	60	*
	%	94.1	83.3	
計画に基づいた保育の記録	度数	74	55	
	%	87.1	76.4	
個人記録	度数	74	44	**
	%	87.1	61.1	

*p<.05　**p<.01

②計画作成時に参考とする情報

図 10 の通り、「自園のこれまでの実践」が 82.6% と最も多く、次いで、「保育関係の情報誌」が 52.2%、「保育所保育指針等」21.1%「文科省資料」18.6% であった。

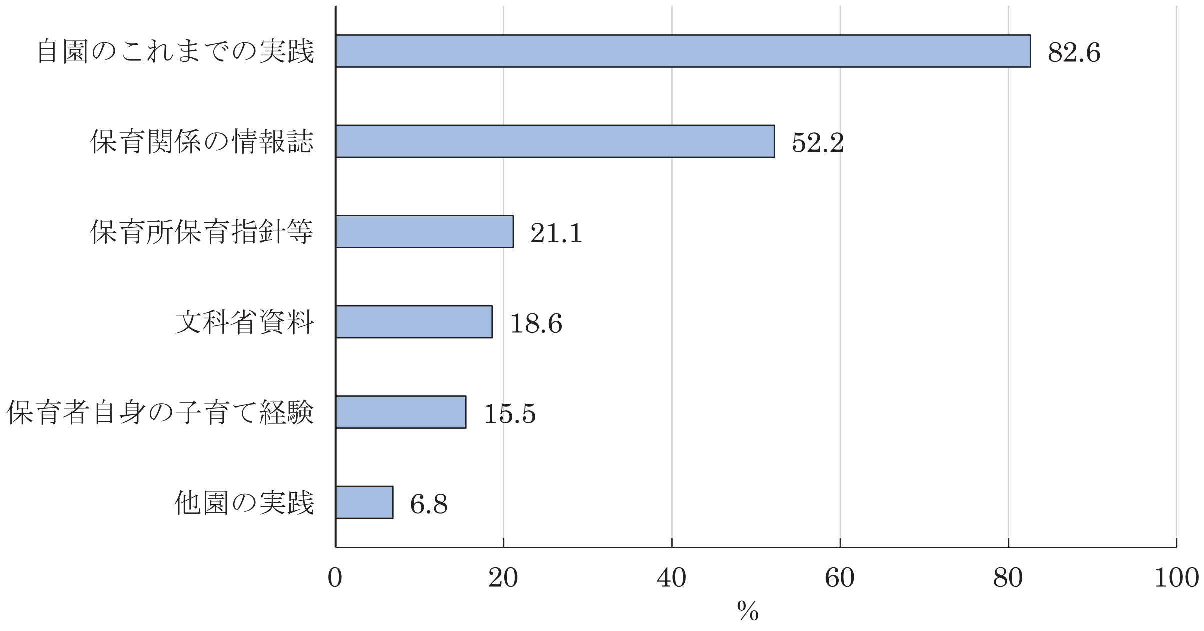

図 10　計画作成時に参考とする情報（N ＝ 161）

ここでも、「通常型」と「特別型」との比較をした結果、表 9 の通りであった。「保育所保育指針等」「文科省資料」は、「通常型」が有意に高く、「保育者自身の子育て経験」は「特別型」が有意に高かった。

表 9　保育の参考資料（上段：選択された数 / 下段：全体に占める率）

		通常型 N ＝ 85	特別型 N ＝ 72	検定結果（Fisher の直接法）
自園のこれまでの実践	度数	68	64	
	%	80.0	88.9	
保育関係の情報誌	度数	38	44	
	%	44.7	61.1	
保育所保育指針等	度数	23	9	*
	%	27.1	12.5	
文科省資料	度数	22	7	*
	%	25.9	9.7	
保育者自身の子育て経験	度数	7	18	**
	%	8.2	25.0	
他園の実践	度数	9	2	
	%	10.6	2.8	

*p<.05　**p<.01

③保育で重視する項目

図 11 の通り、30 項目の中で、「とても重視している」の割合が最も高かったのは「㉗一人一人の 2 歳児の成長・変化を、保育者同士で共有する」77.6% であった。

70% を超えている項目は、「⑱一日の中で、休息や水分補給を確認し、促す」74.5%、「⑯ 2 歳児の手が届く範囲の物は、特に安全性を点検し、危険な物は取り除く」72.7%、「㉙一人一人の 2 歳児の様子を保護者に伝える」71.4%、「㉘次の保育の展開について、保育者同士で話し合う」70.8%であった。

一方、「とても重視している」の割合が 40% 以下と少ない項目は、「④心地よい音質、親しみ易い遊具・用具を用意する」38.8%、「㉑園行事への参加は短時間(一部への参加)だけにする」36.5%、「⑫様々な素材に触れる遊びを取り入れている」35.0%、「②遊びのコーナー以外に寝ころんだりゆったりしたりするスペースを設定する」32.5%、「⑬保護者と一緒に活動する場面を取り入れる」23.6% であった。

最も低い項目は、「㉓物の取り合いなど、トラブルの場面では、保育者はすぐに止める」の 16.9% であった。

ここでも差異が予想されるため、「通常型」と「特別型」のそれぞれの項目の評定平均値(※)を算出し、t 検定を行った結果、図 12 の通りであった。

「通常型」が有意に高かった項目は次の通りであった。

② 遊びのコーナー以外に寝ころんだりゆったりしたりするスペースを設定する

⑧ 周囲の幼児と遊ぶ経験を取り入れる

⑨ 自然と触れ合う経験を取り入れる

⑱ 一日の中で、休息や水分補給を確認し、促す

㉒ 園生活の仕方や約束を知らせる

⑪ 歌やリズムを楽しむ遊びを取り入れる

㉙ 一人一人の 2 歳児の様子を保護者に伝える

㉗ 一人一人の 2 歳児の成長・変化を、保育者同士で共有する

一方、「特別型」が有意に高かったのは、次の 1 項目のみであった。

⑬ 保護者と一緒に活動する場面を取り入れる

※評定について、P61 問Ⅱ 4 を参照

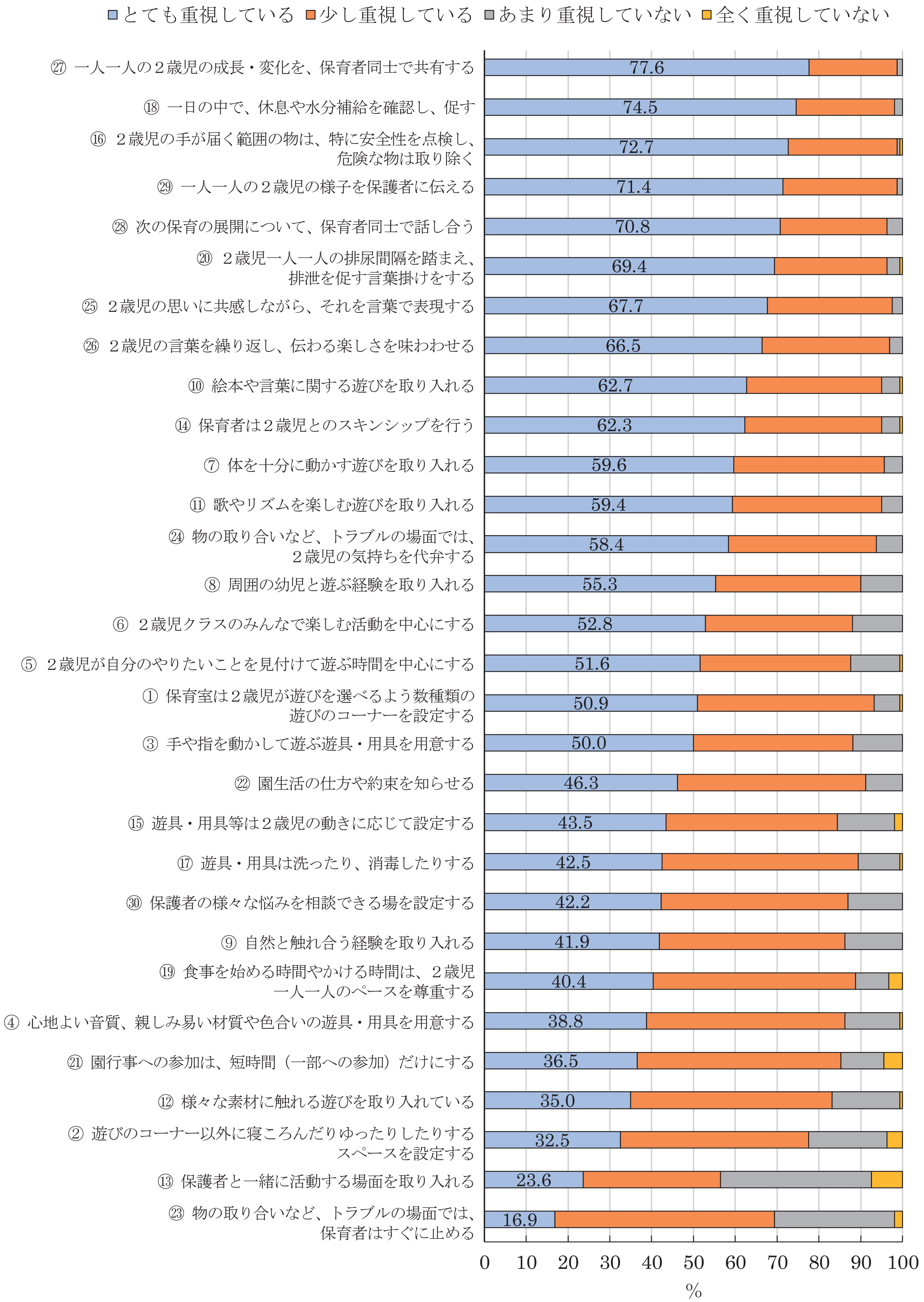

図 11　保育で重視する項目（N ＝ 161）

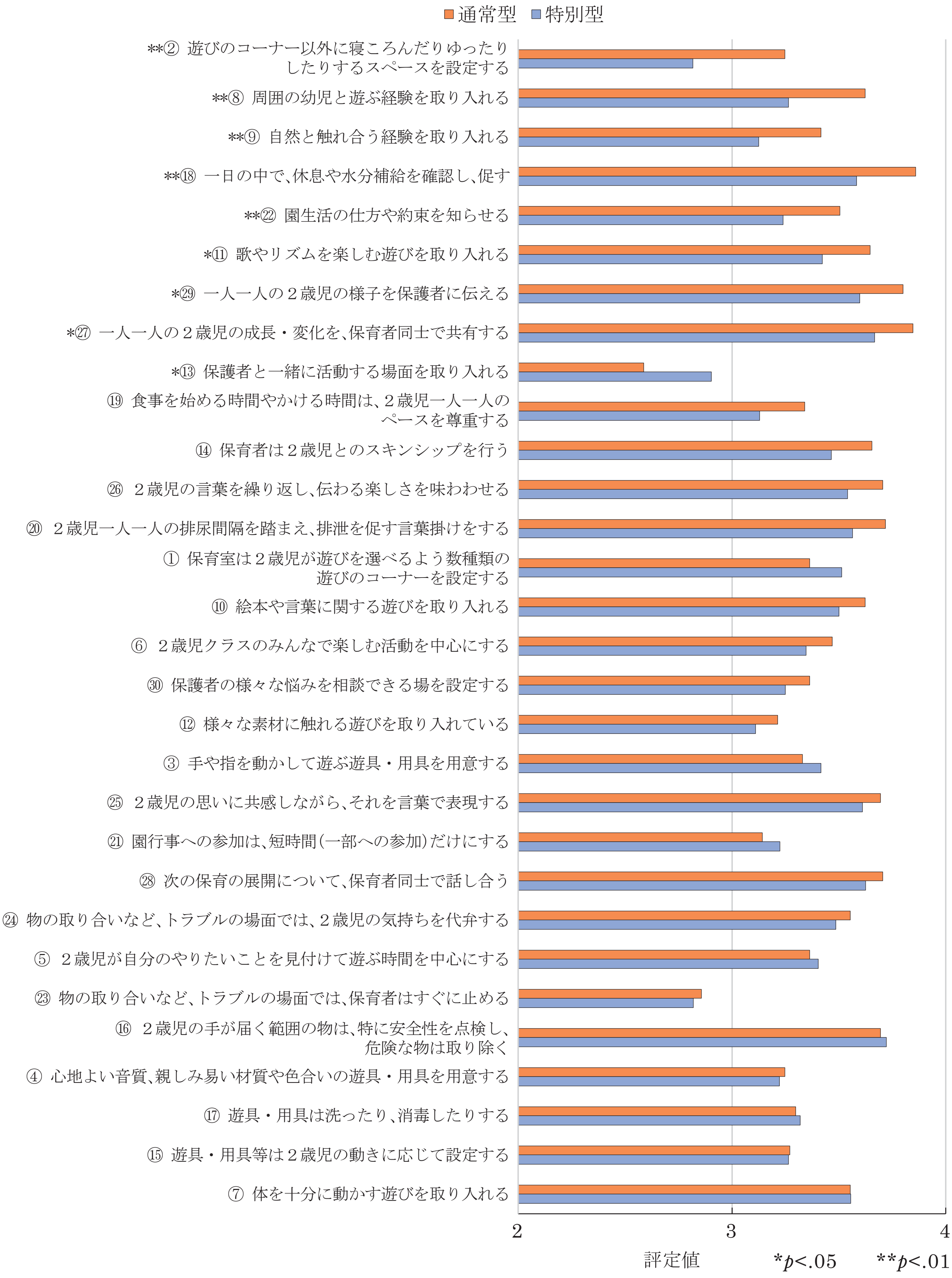

図 12　保育の実施方法による比較（N ＝ 161）

6)　受入れを実施した成果と課題

①２歳児の受入れを実施した成果

受入れの成果については、10 項目の選択肢から 3 つの項目を選択する質問であった。その結果は図 13 の通りであった。成果があった項目で選択率が最も高かったのは、「3 歳児の園生活のスタートが円滑になった」65.2% であった。次いで、「2 歳児が園生活の流れが分かり、安心して遊べるようになった」62.7% であった。

一方、選択率の成果の低い項目は、「保育者同士の連携がスムーズにとれるようになった」「保護者が 2 歳児の興味・関心に気付くようになった」共に、7.5% であった。

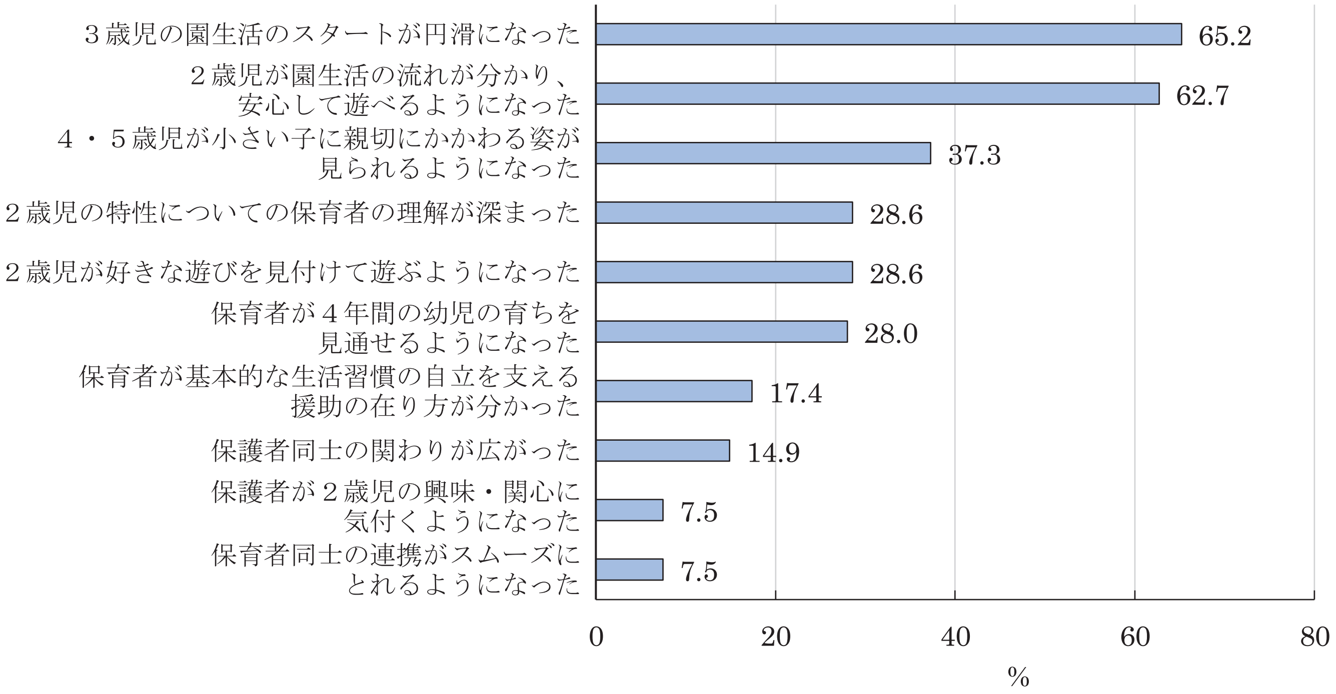

図 13　2 歳児の受入れを実施した成果（N ＝ 161）

前節と同様に「通常型」と「特別型」との比較をした結果、表 10 の通りであった。「通常型」が有意に高いのは、「4・5 歳児が小さい子に親切にかかわる姿が見られるようになった」「保育者が 4 年間の幼児の育ちを見通せるようになった」である。一方、「特別型」が有意に高いのは、「保護者同士の関わりが広がった」である。

表 10　受入れの成果(上段：選択された数 / 下段：全体に占める率)

		通常型 N ＝ 85	特別型 N ＝ 72	検定結果 (Fisher の直接法)
3 歳児の園生活のスタートが円滑になった	度数	50	53	
	%	58.8	73.6	
2 歳児が園生活の流れが分かり、安心して遊べるようになった	度数	55	45	
	%	64.7	62.5	
4・5 歳児が小さい子に親切にかかわる姿が見られるようになった	度数	41	16	**
	%	48.2	22.2	
2 歳児の特性についての保育者の理解が深まった	度数	27	18	
	%	31.8	25.0	
2 歳児が好きな遊びを見付けて遊ぶようになった	度数	20	23	
	%	23.5	31.9	
保育者が 4 年間の幼児の育ちを見通せるようになった	度数	31	13	*
	%	36.5	18.1	
保育者が基本的な生活習慣の自立を支える援助の在り方が分かった	度数	13	15	
	%	15.3	20.8	
保護者同士の関わりが広がった	度数	4	20	**
	%	4.7	27.8	
保護者が 2 歳児の興味・関心に気付くようになった	度数	5	7	
	%	5.9	9.7	
保育者同士の連携がスムーズにとれるようになった	度数	6	5	
	%	7.1	6.9	

*p<.05　**p<.01

② 2 歳児の受入れを実施した課題

選択肢より 2 つの項目を選択した結果、図 14 の通りであった。課題があった項目で最も高かったのは、「園の費用負担（人件費、施設改修費等）」50.9% であった。次いで、「2 歳児の保育と幼稚園教育の関連付け」44.1%、「保育者の 2 歳児保育の基本的な知識・技能の獲得」36.6% であった。

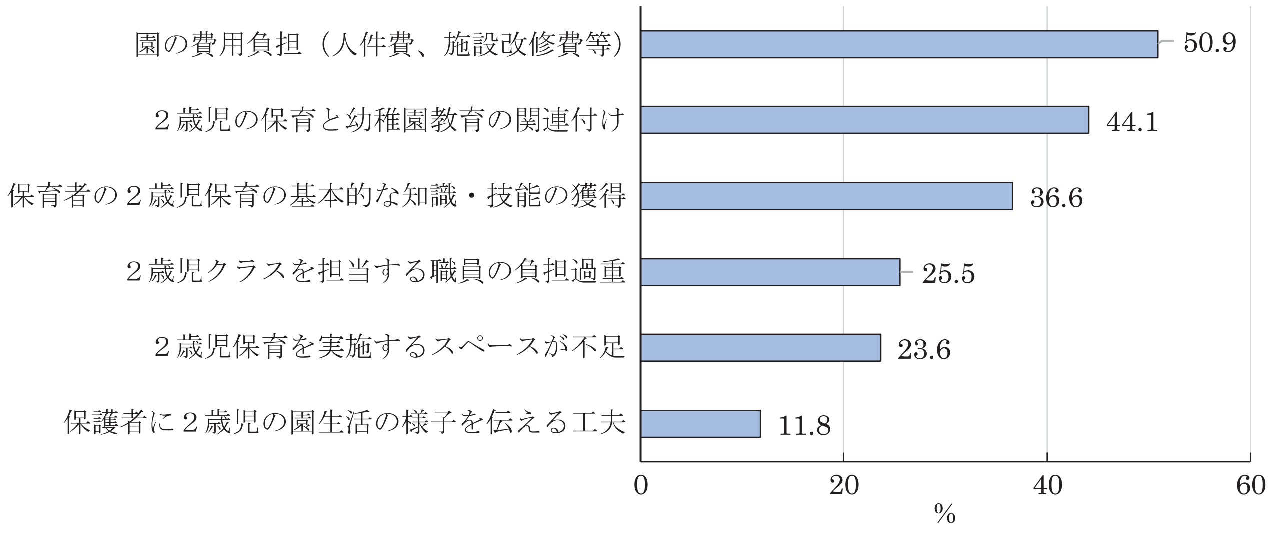

図 14　2 歳児の受入れを実施した課題

受入れの課題について、「通常型」と「特別型」との比較をした結果、表 11 の通り、有意差はなかった。

表 11　受入れの課題（上段：選択された数 / 下段：全体に占める率）

		通常型 N ＝ 85	特別型 N ＝ 72	検定結果 （Fisher の直接法）
園の費用負担（人件費、施設改修費等）	度数	45	35	
	%	52.9	48.6	
2 歳児の保育と幼稚園教育の関連付け	度数	35	34	
	%	41.2	47.2	
保育者の 2 歳児保育の基本的な知識・技能の獲得	度数	36	21	
	%	42.4	29.2	
2 歳児クラスを担当する職員の負担過重	度数	21	19	
	%	24.7	26.4	
2 歳児保育を実施するスペースが不足	度数	17	21	
	%	20.0	29.2	
保護者に 2 歳児の園生活の様子を伝える工夫	度数	7	11	
	%	8.2	15.3	

$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$

7） 補助金の受入れ状況

図 15 の通り、行政からの補助の状況は、「運営費の支援は受けていない」55.0% が最も多かった。

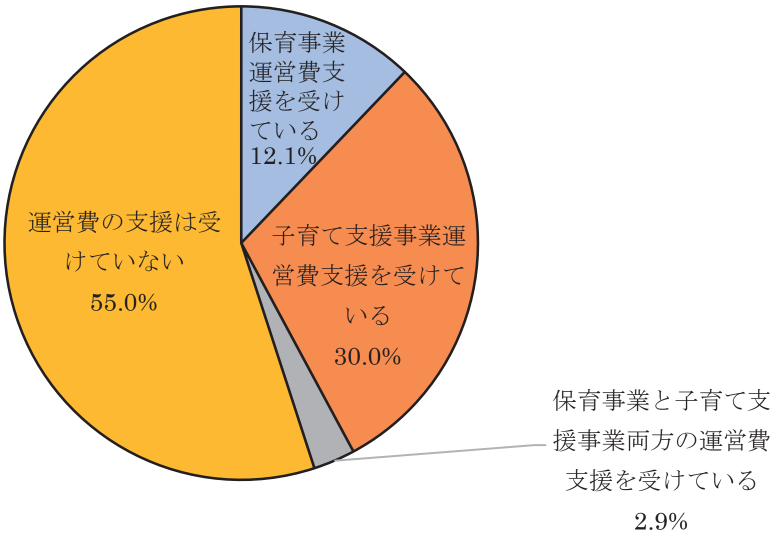

図 15　補助金の受入れ状況（N ＝ 140）

8） 2 歳児保育を実施していない園の状況

① 2 歳児保育の必要性

2 歳児保育を実施していない園に対し、2 歳児保育の必要性について尋ねた。なお、8）における一連の質問については設置者によって回答が顕著に異なることが予想されたので、設置者別にも集計し、比較することとした。ただし、国立については園数が他に比べて極端に少ないため、数値の掲載だけにとどめたい。

表 12 の通り、全体では「必要性なし」66.8% が「必要性あり」33.2% よりも多く、2 倍以上の開きがあった。設置者別に見ると、公立ではその差が広がり、「必要性なし」が約 8 割を占めた。一方、私立では逆に「必要性あり」53.1% が「必要性なし」46.9% をやや上回った。

表 12　2 歳児保育の必要性（%）

	全体 (N=416)	設置者別		
		国立 (N=12)	公立 (N=191)	私立 (N=75)
必要性あり	33.2	41.7	19.1	53.1
必要性なし	66.8	58.3	80.9	46.9

※ N は有効回答園数（以下同じ）

②２歳児保育の「必要性あり」と回答した園の状況

2 歳児保育の「必要性あり」と回答した園に、まず、その理由を尋ねた。その結果、表 13 の通り、全体では「幼稚園教育への円滑な接続」44.2％が最も多く、次いで、「育児不安解消のための子育て支援」17.4％、「就労支援」15.9％、「2 歳児に必要な体験の提供」14.5％がほぼ同程度の割合で続き、「家庭の教育力向上」8.0％が最も少なかった。設置者別に見ると、公立、私立ともに「幼稚園教育への円滑な接続」がもっとも多かったが、公立では 28.9％に止まり、相対的に「育児不安解消のための子育て支援」24.4％、「2 歳児に必要な体験の提供」20.0％の割合が多かった。一方、私立では全体とおおむね同様の分布であった。

表 13　2 歳児保育の必要な理由（％）

	全体 (N=138)	設置者別		
		国立 (N=5)	公立 (N=45)	私立 (N=85)
幼稚園教育への円滑な接続	44.2	80.0	28.9	49.4
育児不安解消のための子育て支援	17.4	20.0	24.4	14.1
就労支援	15.9	0.0	15.6	16.5
2 歳児に必要な体験の提供	14.5	0.0	20.0	12.9
家庭の教育力向上	8.0	0.0	11.1	7.1

次に、実施していない理由について尋ねた結果、表 14 の通り、全体では「設置者の方針」34.6％が最も多く、次いで「実施するスペースの確保が困難」30.9% が続き、両者で 6 割強を占めた。設置者別に見ると、公立では「設置者の方針」81.8％に集中した。それに対し、私立では、「設置者の方針」は 10.7％に過ぎず、「実施するスペースの確保が困難」42.9% が最も多く、「園の費用負担が過重」16.7％、「担当する職員の確保が困難」14.3％が続いた。

表 14　2 歳児保育を実施していない理由（％）

	全体 (N=138)	設置者別		
		国立 (N=5)	公立 (N=44)	私立 (N=84)
設置者の方針	34.6	40.0	81.8	10.7
実施するスペースの確保が困難	30.9	40.0	4.5	42.9
園の費用負担が過重	11.0	20.0	0.0	16.7
担当する職員の確保が困難	10.3	0.0	4.5	14.3
2 歳児保育の知識・技能が不十分	0.7	0.0	2.3	0.0
その他	12.5	0.0	6.8	15.5

表 14 の実施していない理由の「その他」12.5％について、記述された内容を分類した結果、以下のように分かれた。

・月 1 回程度や預かり保育として実施しているため
・定員を充足しているため
・希望者がないため
・3 歳未満児は、集団での教育よりも、個別対応が不可欠であるため
・法制度の制約のため
・現在は行っていないが、開始する予定があるため

③ 2 歳児保育の「必要性なし」と回答した園の状況

2 歳児保育が「必要性なし」と回答した園に対し、その理由を尋ねた。その結果、表 15 の通り、全体では、「3 歳までは、家庭での経験を多くさせたい」55.4％が半数以上を占めた。設置者別に見ても分布の傾向はほぼ同様であった。

表 15　2 歳児保育を必要としない理由（％）

	全体 (N=269)	設置者別		
		国立 (N=7)	公立 (N=184)	私立 (N=73)
3 歳までは、家庭での経験を多くさせたい	55.4	42.9%	54.3%	60.3%
保護者からの要望がない	19.0	28.6%	20.7%	13.7%
その他	25.7	28.6%	25.0%	26.0%

表 15 の 2 歳児保育の実施が必要ではない理由の「その他」25.7% について、記述された内容を分類した結果、以下のように分かれた。

・3 歳児、満 3 歳児保育の実施が先決であるため
・発達を捉えたカリキュラムの準備が不十分であるため
・施設、人員、準備が不十分であるため
・3 歳未満は、家庭での教育が重要であるため
・保育所で受け入れているため
・親子登園、園庭開放等を行っていて十分であるため
・国や自治体、設置者の方針のため

9)　保護者に対する子育て支援の取組状況

①保護者からの相談

図 16 の通り、保護者からの相談で多いのは「発達の遅れ」74.3% であった。次いで多いのは「排泄」46.9％、「食事」41.3％であった。最も少ないのは「家族との関係」2.4% であった。

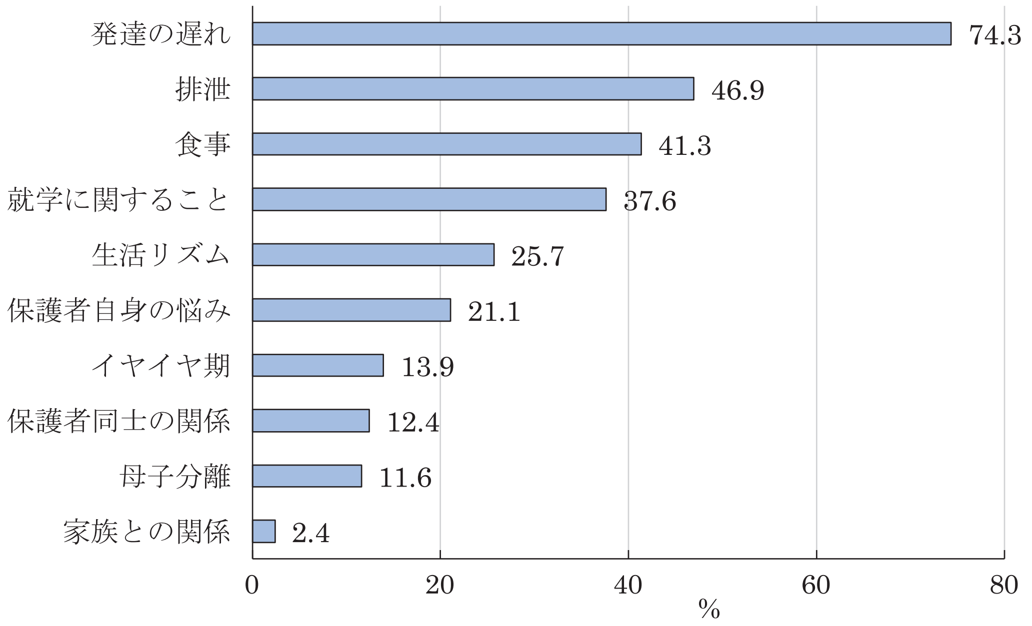

図 16　保護者からの相談（N ＝ 588）

②子育て支援の実施と成果

図 17 の通り、「とても成果がある」が多かったのは「未就園児の親子登園」48.0％であった。一方、「とても成果がある」が少なかったのは「子育て情報の発信」17.8% であった。

なお、解答園数（N）の数値が項目によって異なるのは、「実施していない」を選択した園数を除いたためである。

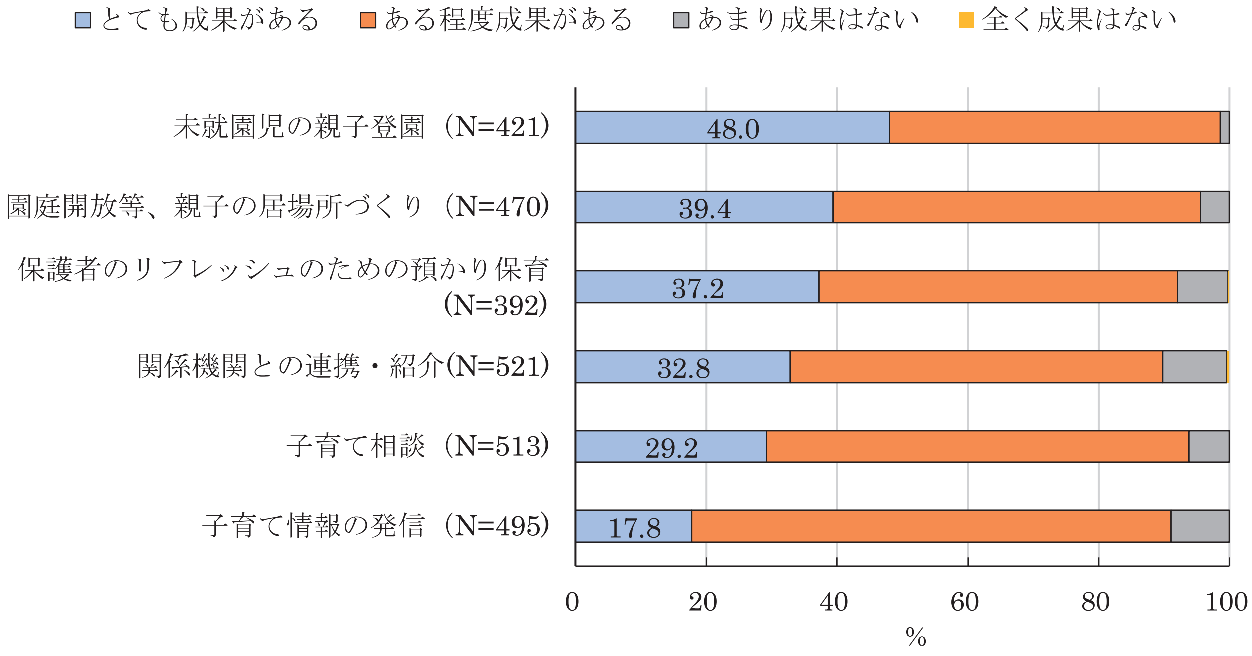

図 17　子育て支援の成果

（2）質問紙調査結果のまとめ

全国の国公私立幼稚園 1,000 園を対象にした質問紙調査（回収率 59.3%）の結果から示唆されることを以下にまとめた。

【保育体制について】

① **2歳児受入れの実施園は、回答園全体の3割弱であるが、そのほとんどが私立幼稚園であった。**

2歳児受入れを実施している園は、593 園中 161 園で、全体の3割弱（27.2%）であった。その内訳をみると、私立幼稚園が 97.6%を占めていた。

② **2歳児受入れの目的は「幼稚園教育への円滑な接続」が最も多く、そのうち8割が3歳児学級へ入園していた。**

2歳児受入れの目的で、「幼稚園教育への円滑な接続」5割強、「保護者の育児不安解消のための子育て支援」「2歳児に必要な体験の提供」がそれぞれ2割弱と続いた。2歳児クラスから3歳児学級への入園率8割強という結果から、目的に関わらずそのまま3歳児学級に入園する可能性が明らかになった。一方、「就労支援」を目的とする受入れは1割と少なかった。

③ **2歳児クラスの受入れ人数の平均は約 14 人である。2歳児受入れのクラスは、2名から3名の職員が保育をしているケースが多いが、担当制を取り入れている園は少なかった。**

2歳児受入れの総人数は2人から 90 人と幅広く、受入れ人数の平均は 24.5 人であった。また、クラス数は1クラス開設が最も多く、平均は 1.8 クラスであった。総人数とクラス数から算出すると、1クラス当たりの人数は約 14 人であった。

そして1クラス当たりの職員数は2名が最も多く、1クラス当たりの職員の平均値は 2.5 人であった。また、担当制を取り入れている園は全体の2割弱である。職員一人当たりの担当幼児数は、平均 6.3 人で、児童福祉施設最低基準（満一歳以上満三歳に満たない幼児おおむね6人につき一人以上）にほぼ近い数字であった。

④ **保育実施日数は、週1日から6日と多様だった。**

1週当たりの保育実施日数の平均は 3.8 日、保育時間は平均 4.1 時間であった。

週 0.5 日・1日の開設している園の通園率は 10 割だが、2日以上開設している園においては、通園が1日だけという園もあった。毎日開設している幼稚園において、各自の都合で2日から3日通うということも考えられるが、受入れ希望者をいくつかのグループに分けて幼児一人一人の通園日が限定されている可能性もあるので、訪問調査の結果と合わせて考察する必要がある。

⑤　時間外保育を実施している園の8割以上は17時から19時以降まで預かり、就労支援のニーズに対応できるようにしていた。

時間外保育を実施している園は、全体の6割である。そのうち、保育終了時刻で最も多いのは18時であった。保育終了時刻を17時から19時までとしている園は8割強であり、就労支援という保護者のニーズに対応していると考えられる。

⑥　2歳児クラスには、幼稚園教諭免許や保育士資格を持った職員が配置されている。

担当職員は、「幼稚園教諭免許・保育士資格の両方を持っている」が8割で、幼稚園教諭免許のみ（1割）、保育士資格のみ（0.5割）と合わせると9割強で、ほとんどが免許あるいは資格を持っていることが分かった。しかし、わずかではあるが幼稚園教諭免許や保育士資格がない職員が保育を担当しているというケースがあった。園長やフリーの教員等が見守る状況があったとしても、改善する必要があると考える。

⑦　2歳児専用の備品は用意されているが、施設等については、2歳児にふさわしいものが整えられているとは言えない状況がある。

2歳児専用に用意している場やもので、最も多いものは「保育室」「机」「椅子」で8割強である。しかし、基本的生活習慣を身に付けるために必要な「トイレ」「手洗い場」等の設備は5割程度であり、2歳児専用の「砂場」「園庭の固定遊具」は1割から2割程度だった。幼児の背丈など身体の発達や大きさに合わせた環境の整備は今後の課題だと思われる。

【保育の内容・方法について】

①　8割以上の園で、指導計画と保育記録を作成し、見通しを持って2歳児保育を展開していた。

「日案（週案）」は9割近くの園で作成、「年間指導計画」や「保育記録」は8割以上の園で作成しており、幼児の実態を捉えて計画に基づいて2歳児受入れを行っていることが分かる。特に、週5日から6日登園する通常型では、計画・個人記録の作成率が高く、複数の担当者が日々の受入れを実施する上で、計画と保育記録を共有することが必要であることが示唆された。

②　保育の計画作成時に参考とする情報は、「自園のこれまでの実践」が最も多かった。

計画作成時に参考とする情報は、「自園のこれまでの実践」が約8割と最も多く、「保育関係の情報誌」が約5割、一方「保育所保育指針」「文部科学省資料」等は、2割前後と少なかった。

保育所保育指針の活用は、通常型の園の方が特別型の園に比べて有意に高い。しかしながら、全体数から見ると2割と少なく、2歳児の発達を捉えている「保育所保育指針」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」等を参考にすることが望まれる。

③　2歳児保育では保育者同士や保護者との連携及び養護への配慮が重視されていた。

2歳児保育の中で、「とても重視している」ことの割合が最も多かったのは「一人一人の2歳児の成長・変化を、保育者同士で共有する」だった。続いて「一日の中で、休息や水分補給を確認し、促す」「2歳児の手が届く範囲の物は、特に安全性を点検し、危険な物は取り除く」「一人一人の2歳児の様子を保護者に伝える」「次の保育の展開について、保育者同士で話し合う」で、保育者同士や保護者との連携及び養護に関する項目が多い。

さらに、保育の実施方法による比較をt検定で行った結果、通常型が有意に高かった項目は、2歳児の発達を考慮した養護を中心とする項目（寝ころんだりゆったりしたりするスペース、休息や水分補給を確認)、教育的な環境（自然との関わり、園生活の仕方や約束、周囲の幼児と遊ぶ経験）の2項目だった。

一方、特別型が有意に高かったのは、「保護者と一緒に活動する場面を取り入れる」で、保護者と共に2歳児の成長を見守っていくという園の方針が表れていることが分かる。

④　保育者が感じている2歳児受入れの成果は、通常型と特別型で若干異なる。

2歳児の受入れを実施した成果は、全体では「3歳児の園生活のスタートが円滑になった」「2歳児が園生活の流れが分かり、安心して遊べるようになった」「4・5歳児が小さい子に親切にかかわる姿がみられるようになった」の順であった。

通常型では、「4・5歳児が小さい子に親切に関わるようになった」という在園児の育ちへの影響を示す項目、「保育者が4年間の幼児の育ちを見通せるようになった」という保育者の力量に関する項目が有意に高く、2歳児保育と幼稚園教育との接続につながることが示唆された。

一方、特別型が有意に高かったのは、「保護者同士の関わりが広がった」で、保護者と一緒に楽しむことも多い特別型の特徴とも考えられ、保護者が地域につながる力量を向上させる親育ち支援にもつながったと考える。

通常型と特別型で成果と感じているものに差が見られたが、これは、この設問が成果に関する10項目の選択肢から3つの項目を選択する質問であったことと、それぞれの園が重視している目的と活動の特性に起因する成果の差と推察され、それぞれの型の特徴を表していると捉えられる。このことについては、訪問調査協力園における成果と合わせて後程詳しく考察していく。

【2歳児保育と子育て支援の在り方について】

(2歳児保育について)

①　2歳児保育を実施していない園においては、2歳児保育の必要性について、3割強が「必要性あり」、7割弱が「必要性なし」であった。

「必要性あり」と回答した理由は、「幼稚園教育への円滑な接続」が4割強で、以下、「子育て支援」「就労支援」「2歳児に必要な体験の提供」が2割から1割強の間に続いた。

「必要性なし」と回答した園の主な理由は、「3歳までは、家庭での経験をさせたい」が6

割弱、「保護者からの要望が無い」が2割である。その他の理由では、「3歳児、満3歳児保育の実施が先決である」「カリキュラム、施設、人員、準備が整っていない」「国や自治体、設置者の方針」「保育所で受け入れている」等だった。

② 2歳児保育の必要性は感じているが実施していない園において、実施しない主な理由は、条件整備が整っていないことであった。

2歳児保育の必要性を感じているが実施していない園の3割強は、「設置者の方針」で、3割が「実施するスペースの確保が困難」、1割が「園の費用負担が過重」と「担当する職員の確保が困難」であった。これについては、設置者によって回答が顕著に異なり、公立では「設置者の方針」が8割以上であったが、私立においては、「実施するスペースの確保が困難」が4割強で、「園の費用負担が過重」が2割弱、「担当する職員の確保が困難」が1割強、「設置者の方針」が1割であった。

③ 実施した園における2歳児の受入れの課題は補助金の活用率を上げることと研修体制の構築であった。

2歳児の受入れの課題は、「園の費用負担（人件費、施設改修費等）」が5割と最も多かった。次いで、「2歳児の保育と幼稚園教育の関連付け」が4割強、「保育者の2歳児保育の基本的な知識・技能の獲得」が4割弱であった。

2歳児の受入れを実施するためには、開設する施設の整備や職員の確保が整い、基本的な知識や技能、幼稚園教育との関連等、2歳児保育についての専門性を高めるための研修が必要であることが分かった。

また、行政からの補助の状況は、「運営費の支援は受けていない」55.0%が最も多かった。補助金については、訪問調査協力園の聞き取り（後述）等から、利用しにくい実態があり、今後は補助金の活用率を高めていくことが求められている。

（子育て支援の在り方について）※質問紙調査回答園の全てが回答

④ 子育て支援の活動の中で、最も成果があるのは未就園児の親子登園であった。

幼稚園が行う子育て支援の中で、成果が大きかったのは「未就園児の親子登園」の5割弱であった。また「子育て情報の発信」については、とても成果があったという割合が2割弱であった。単なる情報発信に終始せず、実際に親子で活動することを提案していくことが子育て支援としては有効であることが伺えた。

⑤ 保護者は我が子の成長について不安を感じていた。

保護者からの相談で最も多いのは「発達の遅れ」（7割強）で、次に「排泄」「食事」と続く。保護者は我が子の発達、成長の遅れに不安を感じており、相談したいという気持ちを持っていることが分かった。

2　調査研究２　訪問調査に基づく研究

２歳児の受入れが、どのような施設・設備の中で、どのように園生活が展開されているのか、質問紙調査の内容に関して具体的な情報を得るために、訪問調査協力園を10園設定して調査を行った。ここでは、訪問調査によって得られた、10園の多様な受入れの方法や具体的な保育の工夫等の姿を掲載する。

また、調査の中で、保育の計画や記録等としてどのようなものが作成・実施されているか資料を収集することができた。収集できた資料の数は少ないが、一つ一つの資料を検討する中で、今後の２歳児受入れや２歳児保育、子育て支援、家庭の教育力向上に関わるよりよい実践や今後の課題のヒントが得られる可能性があると考えた。そこで、収集した資料を基に分析・考察を試みたことについて、述べていく。

（１）訪問調査協力園一覧

訪問調査協力園は、待機児童数が多い地域から、プレ保育・２歳児教室等を先行的に実施している幼稚園及び一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）[註4]を実施している幼稚園を選定した。訪問調査は、施設、及び保育の様子を視察し、聞き取りを各園年間２回程度を行った。

表16　訪問調査協力園一覧

地区名	園　　名	備　考
滝川市	広々とした園庭で、自然の恵みを生かしたダイナミックな教育活動をするＡ幼稚園	通常型
仙台市	毎日通い、自然な異年齢の交流を大切にしながら遊びの充実を図るＢ幼稚園	通常型
大阪市	広々した園庭で、保育者と楽しさを共有するＣ幼稚園	通常型
岡山市	毎日通い、好きな遊びが十分にできるＤ幼稚園	通常型
北九州市	２歳児も存分に体を動かす場や時間を確保している Ｅ幼稚園	通常型
町田市	２歳児プレ保育10年の実績を下に、保護者のニーズに応えた一時預かり事業をスタートしたＦ幼稚園	通常型 一時預かり事業園
北九州市	広い保育室で、ゆったり遊び、食事や昼寝のときに環境を再構成するＧ幼稚園	通常型 一時預かり事業園
千葉市	週１回の登園で８グループ　２歳児に無理のない少人数の保育を工夫するＨ幼稚園	特別型
渋谷区	２歳児親子への丁寧な関わりが入園後の豊かな幼稚園生活を支えるＩ幼稚園	特別型
練馬区	子育ての支援を大切にした２歳児の保育をするＪ幼稚園	特別型

註4)　「子育て安心プラン」に参加する市区町村が実施主体となり、幼稚園における２歳児の迅速な受入れを推進する事業。実施場所は幼稚園（新制度園及び私学助成園）

広々とした園庭で、自然の恵みを生かしたダイナミックな教育活動をする

A幼稚園

2 歳から 5 歳まで一貫した基本方針の下に指導計画を作成

・「子どもたちの今と未来の幸せを願って〜一人一人の豊かな育ちを支える質の高い幼児教育を〜」を基本方針に、自由保育を主とし遊びの中から生きていく力・知恵などを学び取れるようにきめ細やかな保育を目指しています。

・素直で感性豊かな心を養い子供一人一人が興味関心をいだき自己充実した日々を過ごせるような保育の実践を目指しています。

特色ある教育活動―活動ステーション

・年に数回、保護者と共に行事を楽しみます。

・雪山登り、雪上サッカー、ソリ遊び、的あて等、広い園庭に積もった雪で遊ぶために、入念な計画と環境整備が必要。全職員が総出で準備し、親子の笑顔があふれます。

(2)　)訪問調査協力園による 2 歳児受入れの状況

雪遊びの身支度は、2 歳児にとっては大仕事！保育者に手伝ってもらいながら、張り切って支度する子供たち。

・親子対抗雪上サッカー身のこなしは子供たちの方が有利！

・保護者と一緒に、雪山のてっぺんから滑り降りるのって楽しいね。

2 歳児の受入れの概要

・クラス編成……毎日クラス（1 クラス　5 名）
・保育時間……9：00 から 14：00
・保育者……1 クラス 2 名。　4・5 月は補助としてフリーが 1 名入る。
・保育室……専用保育室有。保育室の近くに共有のトイレがある。手洗いは保育室内にある。暖かな色合いのカーペット、手作りの布性遊具が置いてある。ロッカー、靴箱は各自ある。机・椅子は 2 歳児用の高さ。
・保育の延長……8：00 から 18：00 まで。2 歳児も受け入れている。
・保護者との連携……連絡帳（日々の記録を記載し、週 1 回保護者へ渡す。保護者からも連絡事項を記入して園に戻す）・園だより・学級だより、登園時や降園時に個別連絡。
・入園前のコース……未就園児対象の親子登園（コロちゃんルーム）を月 2 回、年間 20 回実施。同年令の親子で楽しく活動し、子育てのストレス解消や情報交換に生かす。2 歳児クラスと月 1 回合同保育を実施している。

毎日通い、自然な異年齢の交流を大切にしながら遊びの充実を図る

B幼稚園

異年齢の幼児と自然な交流が生まれる

・保育の流れに応じて遊びの拠点を工夫することで、異年齢の幼児と自然な交流が生まれています。

園の教育方針と2歳児の保育の重点

・探究心や好奇心を大切にし、『やる気』を育みます。
・基本的生活習慣を1つずつ獲得できるように毎日の生活を通して援助しています。

【5歳児保育室と遊戯室前のホールに設置している遊具】

保育室の工夫で見守られる環境に

・既存の施設を利用して専用保育室を職員室内に設定しました。そのため、室内には常に担任以外の保育者がいるので、必要に応じて個別対応がしやすいという利点があり、一人一人のペースを大切にした援助が行われています。2019年度には2歳児の専用保育室を増設し、よりよい環境づくりを行います。
・家庭での子育てを支援することを目的としています。

2歳児の受入れの概要

・クラス編成……1クラス　23名（12月現在）
・保育時間……月から金（9：30から14：00）
・保育者……3名（必要に応じて保育者を増員）　3、4、5歳児の保育の流れを意識した保育の展開ができるよう、担当者は、年度ごとにローテーションをしている。
・保育室……専用保育室有（職員室に隣接）。
各自のロッカーがある。机・椅子は2歳児用の高さで、部分的にカーペットを敷き、寝転ぶことができる。トイレは3歳児と同じところを使い、離れている。
・保護者との連携……必要があれば家に電話をするなどして、連絡を密にとる。
降園時に1日の様子を伝える。
・保育の延長……早朝は7：30から降園後は17：15まで延長を行っている。
預かり保育は、土曜日や長期休業中も行っている。
・毎日降園後に、園庭開放を行っているので、そこでは保護者に見守られて子供同士が伸び伸びと遊んだり、保護者のコミュニケーションの場になったりしている。

広々とした園庭で、保育者と楽しさを共有する

C幼稚園

安心した雰囲気の中で、保育者と一緒に遊びを楽しむ
- 保育者は、子供たちが「幼稚園は楽しい」と感じられるよう、楽しさを共有することを心掛けている。
- 子供の気持ちに寄り添いながら、手を添えたり行動を共にしたりすることを大切に援助している。

広い園庭!!　発達に応じた遊具の設置
- 広い園庭で、2、3歳児用の低い遊具でゆったりと、繰り返し同じ動きを楽しんでいます。
- 園庭では、大きい組の子供たちが関心を持ち、一緒に遊ぼうと誘い掛けてくれます。

安定して、ゆったりと関われる少人数編成
- 落ち着いて過ごせる保育室の広さで、9名の人数にふさわしく、あまり大きくない保育室が安定空間になっています。

2歳児の受入れの概要

・クラス編成……毎日クラス　1クラス　9名、週1クラス　2クラス　　各15名
・保育時間……毎日クラス9：30から15：00、週1クラス10：30から12：00
・保育者……1クラス　2名（主任　教諭）
・保育室……毎日クラスは専用保育室有。　週1クラスは多目的室を保育室として利用。保育室の近くに共有のトイレがある。手洗いはテラスにある。
・保育の延長……毎日クラスの子供たち対象に預かり保育有り。
・親子登園……運動会頃までは親子登園で、その後は子供のみである。
・3歳児への接続……園行事への参加は、保育参観、運動会、遠足、発表会、作品展。
・保護者との連携……3歳児以上の子供たちと同様の連絡（口頭・たより・懇談会・面談・参観・公開保育）、登園時や降園時に個別に話をする。
・2歳児受入れの工夫……保育時間は、入園から4月半ば（12時降園）、4月後半から給食開始（14時降園）、5月半ばから通常（15時降園）。
・入園前のコース……入園前の体験コース（ピコロルーム）は、4月から月1回（10：00から12：00）。週1の2歳児クラスは、入園の準備的な要素があり、ほぼ全員3歳児クラスに入園する。週1クラスで慣れた子供は、10月頃から毎日コースに移動することがある。

毎日通い、好きな遊びが十分にできる

D幼稚園

園の教育理念
・「自分は大丈夫」と自信につながる『心の根っこ』を育てています。

2歳児専用の保育室・園庭
・伸び伸びと遊べる専用の保育室。園庭に出やすく遊具の大きさも2歳児向きです。

生活と遊びの指導を大切に、保育の振り返りを実践に生かしています
・月ごとの指導計画を立て、きめ細やかな保育をしています。一人一人の幼児の生活面の自立や遊びの様子を丁寧に記録にとり、特性を捉えて保育をしています。
・保育室前の階段状のウッドデッキから専用園庭に出やすく、保育室で作った動物のお面を着けて園庭でなりきって遊ぶなど、保育の展開を工夫しています。
・昼食時には、園庭に近隣の保育園児が来て遊ぶ姿や、降園時には在園児が見送る姿を見ることができ、子供同士の親しみや思いやりが育ち、心の根っこにつながります。

2歳児の受入れの概要

・クラス編成……2クラス（1クラス16名）合計32名
・保育時間……月・火・木・金 （8：45から13：50）、水（8：45から11：50）
・保育者……1クラス3名 合計6名
・保育室……専用保育室有。
保育室内に手洗い・トイレがある。各自のロッカーがある。
机・椅子は2歳児用の高さである。この他にウレタン製の低いベンチもあり遊具になったり、集合時に使ったりしている。
・保護者との連携……連絡帳があり、必要に応じて双方から連絡をとれるようになっている。
2歳児は安全上の理由からスクールバスは利用できないため、送り迎えが原則である。登園時や降園時に個別に話をすることができる。またホワイトボードなどを使って、口頭でその日の様子を伝えている。
・保育の延長……就労証明のある場合のみ、18:30まで延長を認めている。

２歳児も存分に体を動かす場や時間を確保している

E 幼稚園

ゆったり遊べるグループ編成

・1クラス（39名）を2グループに分けて担任1名と各副担任（2名）が担当しています。

・毎日登園する2歳児と、週3日登園する2歳児が一緒に生活しています。

好きな場を選んで遊べる園舎・年長児の姿も見られる園庭

・2歳児の保育室と3歳児の保育室、広いホールは、1階に設置。3歳児が活動する様子を垣間見ながら、憧れ、真似て遊びます。

・ホール前の園庭・芝生では、裸足で遊べ、年長の活動も見られます。

落ち着いて遊びを楽しめるような保育室の工夫

・保育室を遊具の棚で半分区切って、各グループがそれぞれに落ち着いて遊べます。

運動的な遊びに誘う広いホール、チャレンジしたくなる固定遊具

・できないけれど試してみたい幼児の気持ちを受け止めて援助する保育者。

2歳児の受入れの概要

・クラス編成……1クラス（2グループ）合計39名
毎日登園25名、月・水・金登園14名（毎日登園する幼児と混合で保育）

・保育時間……月から金（9：30から14：30）

・保育者……1グループ3名（クラス担任1名、副担任2名、補助者3から4名）合計6名

・保育室……専用保育室有。
保育室に手洗い・トイレが接続。各自の荷物はハンガー等に掛ける。
机・椅子は2歳児用の高さ。ウレタン製の積み木を集合時に活用するときもある。

・保育の延長……2歳児は就労証明のある場合のみ、延長を認めている。

・親子登園……2歳児クラスの他に、親子で登園する「親子クラス」（月3回）。
ここから2歳児クラスに入ることもある。

・3歳児への接続……園行事への参加は、保育参観、運動会、親子遠足（2回）、発表会。

・保護者との連携……連絡帳があり、必要に応じて双方から連絡をとれるようになっている。保護者の送り迎えが原則で、登園時や降園時に個別に連絡する。

・保育の記録……「なんでもノート」と称する保育の申し送りノート（大切なことは付箋で目立つように工夫）を活用。

・チームワークを大切にし、各グループをできるだけ副担任に任せて、担任が全体を把握している。

２歳児プレ保育１０年の実績をもとに、
保護者のニーズに応えた一時預かり事業をスタート

F 幼稚園

一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）開始のきっかけ
・保護者の要望がある。
・保育室にゆとりがあり、少人数なら可能。
・プレ保育 2 歳児クラス 10 年以上の実績がある。
・市の待機児解消につながる。
　約 1 年の準備期間を経て、2 歳児定員 18 名でスタート。

働きたい保護者を応援・安心して預けられる場所を提供
・利用要件は、3 号認定を取得した満 2 歳児。
・就活中、介護等も 3 号認定取得可能…子育てにやさしい行政・多様な保護者のニーズに応じた幼稚園。
・時間設定は保護者のニーズに応じた割振りが特色
　一日（定期利用）・半日（一時利用　午前・午後）。
・預かり保育は在園児と同じ時間設定（7：30 から 18：30）。

・連絡帳による保護者との信頼関係が大切…一日の我が子の様子を伝えることが安心につながる。
・園行事等に参加して、在園児やプレ保育の幼児との交流が生まれる。

一時預り事業 1 年間の取組み　（・工夫したところ　○課題）
・保育を必要とする保護者のニーズに応じた預かり体制を工夫した。一日の生活の流れを基本に生活リズムを保ち、2 歳児が安定・安心して過ごせるように工夫した。
・保護者の休日には、プレ保育（なかよしクラス）に登録して参加できるので、親子で楽しみながら、経験も広がる。
○保育者の確保……午前・午後 5 時間半勤務で交代制。午後の時間帯（13：00 から 18：30）を担当する保育者確保が難しい。
○ 2 歳児は月齢の差が大きく、身のこなし、動き等に差があるため、遊び方に工夫が必要である。

2 歳児の受入れの概要

・クラス編成……1 クラス（定員 18 名で募集：現在は定期利用 9 名、一時利用 9 名）
・保育時間……一日利用 7：30 から 18：30　給食あり。
　半日利用 7：30 から 13：00　13：00 から 18：30
・保育者……2 名から 3 名の保育者が担当（利用状況に応じて配置人数を調整）
・保育室……専用保育室有。（園舎 1 階）　保育室の近くにトイレ、手洗いがある。
　ロッカー、靴箱は各自ある。机・椅子は 2 歳児用の高さ。
・プレ保育(2 歳児クラス)　週 1 回（水・木・金曜日クラス）各 20 組の親子で活動　10：15 から 11：15
　後半（10 月）からは 12：45 まで延長し、母子分離で保育。

広い保育室で、ゆったり遊び、食事や昼寝のときに環境を再構成する

G 幼稚園

曜日によって異なる出席者の状況を把握する工夫

・毎日登園する２歳児と、週３日登園する２歳児が１クラス（25名）で、一緒に生活しています。
・月・水・金曜日と、火・木曜日では、出席者が異なるため、曜日ごとの出席者一覧表があります。

広い保育室を保育者同士の連携で、保育の展開に応じた環境の再構成

・広いホールを区切って、遊びのコーナーを作ったり、昼寝のコーナーを作ったりして保育を展開しています。
・担任が全体を把握し、補助者が保育の展開を見通して、再構成しています。

自由に好きな遊びを楽しむ時間と先生と一緒に遊ぶ時間

・保育室の広さをいっぱいに使って、一人一人の子供が好きな遊びができるように遊具を準備しています。

２歳児の受入れの概要

・クラス編成……１クラス 25 名（３号認定の幼児　４名）
　毎日登園 19 名、月・水・金登園６名　計 25 名
・保育時間……月から金（9：30 から 14：30）
・保育の延長……３号認定の幼児と若干名の２歳児（15：00 から 18：00）
・保育者……４名（担任１名、補助者３名）
　保育の展開は、担任がリードし、好きな遊びの場面では、それぞれの補助者が一人一人の幼児の動きに対応している。
・保育室……専用保育室有。
　保育室に手洗い・トイレが隣接。各自のロッカーがある。
　机・椅子は２歳児用の高さ。ウレタン製の積み木を集合時に活用している。
・親子登園……２歳児クラスの他に、親子で登園する「親子クラス」がある。
・保護者との連携……連絡帳があり、必要に応じて双方から連絡をとれるようになっている。保護者の送り迎えが原則で、登園時や降園時に個別に連絡する。
・その他……給食は、外部から弁当を搬入、アレルギー対応有。

週１回の登園で８グループ　２歳児に無理のない少人数の保育を工夫する

H幼稚園

安心して集団生活に慣れるための配慮

・１、２学期は少人数のグループ、１時間 30 分の短時間保育でゆったり安心して過ごします。

	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
9：15〜10：45	A（8 人）	C（11 人）	E（7 人）	G（10 人）
11：00〜12：30	B（5 人）	D（6 人）	F（7 人）	H（10 人）

・３学期は２グループが合体して友だちが増えます。保育時間も１時間長くなってたくさん遊びます。

	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
9：15 〜 11：45	AB（13 人）	CD（14 人）	EF（15 人）	GH（19 人）

（＊ H31.1.25 現在の人数）

「先生がいるから安心」
「友達がいるから楽しい」場所

・4 月は、2 歳児クラスは親子一緒に過ごします。
・5 月から 12 月は、保育者と一緒に楽しく遊び、少しずつ保護者から離れて過ごします。
・1 月から 3 月は、個々の様子に応じて保護者は帰り、子供たちは保育者と一緒にゆったりと過ごします。

丁寧な個別対応で身に付く生活習慣

・生活面は保育者がやり方を分かりやすく示し、個別に関わっていくことで 2 歳児なりに自分でやろうとする姿や成長が見られます。
・「自分でできた！」を保育者も一緒に喜び、「難しいことは先生が一緒にやるから大丈夫！」という温かな関わりを通して、安心感や信頼感をはぐくむことを大切にしています。

2 歳児の受入れの概要

・保　　育　　者……全てのコースを 2 名で担当。（保護者の安心・子供の安定を考えベテランの保育者と在園児クラス補助兼任の保育者）1 月から人数や活動に応じて 1 名補助が入る。
・保　　育　　室……園庭に面した 2 歳児専用の保育室。室内に手洗い、トイレがある。靴箱、ロッカーは、全員で兼用。自分の場所が分かるように個人のシールを貼る。
机、椅子は 2 歳児の身体に合った物を使用。
・保護者との連携……登園時や降園時に口頭で子供たちの様子を伝えている。保護者が気軽に相談できる雰囲気をつくり、個別相談の時間を設定している。
・園舎隣の別棟に保護者専用の談話室を保護者同士の交流の場として開放。情報交換をしながら、お迎えまでの時間を過ごすことができる。

２歳児親子への丁寧な関わりが入園後の豊かな幼稚園生活を支える

Ｉ幼稚園

２歳児から５歳児までの４年間の発達を押さえた教育課程を編成
・2 歳児（ゆっくり）、3 歳児（のびのび）、4 歳児（しっかり）、5 歳児（はつらつ）と、それぞれの育ちを捉えた教育課程を編成し、実践しています。

保護者の手を借りながら、ゆっくりと幼稚園で安心して過ごせる場所になるようにします。

⇒

週 2 日だから、幼稚園に行くのが楽しみになります。

保護者が安心して預けられる場所になるために
・母子分離は親も子も大丈夫になってから、担任と相談しながら進めます。

秘密の小窓―幼稚園の素敵なはからい
・保護者は我が子の様子をそっと見られる窓があります。安心して預けられるように！

保護者が安心できるように！
・送り迎え時の担任との会話、連絡帳、個人面談等を通して、園での我が子の姿から、保護者が子供の発達や子育てで大事なことを気付けるようにしています。

幼稚園生活に円滑に移行できるように
・3 月は 3 歳児の保育室に遊びに行ったり、入園当初は、2 歳児クラスの担任が 3 歳児保育の手伝いに入ったりするなど、園生活に円滑に移行できるように工夫しています。

2 歳児の受入れの概要

・クラス編成……週 2 回クラス（月・木クラス、火・金クラス）
週 1 回クラス（水クラス）の 3 クラス。定員各 15 名、合計 45 名
・保育時間……9：30 から 11：30　5 月から 3 月まで
6 月中旬から希望者は 13：50 まで延長
・保育者……ベテランの保育者 3 名が担当。2 歳児の教育課程にそって、保育のリーダー、保育補佐、個別対応と役割を決めてティーム保育を展開
・保育室……専用保育室でその中に、手洗い・トイレがあり、トイレトレーニングを保護者と共に進める。2 歳児用の防災頭巾もあり、園児と一緒に避難訓練も行う。
・保護者との連携……子育ての喜びを感じ、保護者としての心構えなどが園での生活を通して育つよう、送り迎えの時間に担任と保護者の直接のやり取りを丁寧に行い、保護者を支えている。連絡帳は園での経験や成長など、項目を立てて記入し、月に一度保護者に渡す。学期の終わりには園での写真を貼る。保護者も自由に家庭の様子を記入して園に提出する。

子育ての支援を大切にした２歳児の保育をする

Ｊ幼稚園

保護者同士のつながりを重視

・週１回の親子での登園、子供も保護者も共にゆっくりと園生活に慣れていきます。
・保護者同士のつながりや情報交換を大切に考えて、保育室の一角に大人専用の団欒スペースを設けています。
・保育者の子供への関わり方や言葉掛け等を、保護者が見たり聞いたりしながら学び、自分の子育てに活かしていくことを大切にしています。

・家庭的な雰囲気を醸し出す一軒家の独立した２歳児専用の園舎。
・天窓や明かり取りによる採光と戸外の自然を感じられる工夫がされています。また、間接照明による柔らかな明かり、季節感を感じられる絵画やオブジェ等が飾られており、感覚が豊かになるような環境づくりがなされています。

子育ての支援を重視

・親子登園で降園まで保護者も園内で過ごします。保護者は、保育者の子供への関わり方を目の当たりにしながら学びます。園内での母子分離を目指しています。
・保護者同士が子育てについて情報交換したり、悩み事を話し合ったりすることで不安を解消することを大切に考えています。そのために子育て経験のある保護者と初めて子育てをしている保護者が一緒になるようクラス編成をしたり、保護者同士の交流の場を提供したりしています。
・登降園時に個人面談（15分前後）を行う期間を設けています。
・発達に不安がある保護者のために、発達相談を担当する臨床発達心理士（非常勤勤務）が週２日勤務しています。

２歳児の受入れの概要

・クラス編成……５クラス（５月始まりで、１クラス親子10組、９月以降は親子12組）
　月曜日から金曜日まで各曜日１クラスずつの編成
・保育時間……各クラス（9：30から11：30）
・保育者……専属２名（担任、副担任）
・施設・設備……２歳児専用の園舎（保育室２部屋とキッチン）
　キッチンカウンター、床・壁等木製、床暖房、暖色系の間接照明、キッチンカウンター沿いに保護者用テーブル（団欒用）設置、保育室外側に幅の広いウッドデッキが設えられている。
・保育の内容……造形活動を中心とした年間指導計画に基づき、担任保育者が週、日案を作成副担任と保育の準備、環境づくり、記録、反省・評価を行っている。
　一斉の活動では、必要に応じて保護者が我が子を支援することもある。

（３）訪問調査協力園における指導計画や記録の様式と記載内容例

協力園の中には、指導の計画と保育の記録を作成している園や保護者との連携に連絡帳を活用し成果を上げている園があった。数は少ないが提供していただいた資料を紹介することが、他の幼稚園にとって実践の参考になると考え掲載する。また、訪問調査を行い保育を観察した調査研究実行委員が、これらの収集した資料を読み解き、試みに分析・考察した例を参考例として掲載する。

①指導計画と保育の記録の様式と記載内容例

「通常型」のＡ園では、「年間指導計画」と「週日案」を作成し、保育を実施し、振り返りを記録しながら保育の改善につなげている。その資料を以下に示す。

収集資料１　年間指導計画の様式及び記載内容例（一部抜粋）

Ｉ期（４・５月）	予想される子供の姿	・新しい環境や保育者に戸惑いを感じ母親と離れることへの不安もあり、泣いて遊びに入れないが、少しずつ好きな遊びを見付けられるようになる。 ・兄弟がいる子供は、多少園に馴染みがあり、好きな玩具で保育者や他児と遊べる。 ・自分のマークや園のリズムが分かり、少しずつ慣れ楽しくなる。 ・言葉やしぐさで自分の気持ちや要求を伝えようとしている。
	内容・経験する事がら	・保育室やクラスの名前を覚え、園生活のリズムに少しずつ慣れていく。 ・自分の持ち物の置き場所が分かり保育者と一緒にやりながら生活の仕方を身に付けていく。 ・新しい食事の場に慣れ、友達と一緒に喜んで食べる。 ・名前を呼ばれたら返事をしたり、あいさつをしたりすることを身に付ける。 ・保育者と一緒にトイレに行き排泄し、園のトイレに慣れる。 ・簡単な衣類や帽子、靴の着脱を自分でしようとする。 ・保育者と一緒に手洗い、消毒をする。 ・保育者に側に付いてもらい安心して午睡をする（預かり保育※）。 ・保育者や友達の名前や自分のマークに関心を持ち言葉にする。 ・ボールや積木など好きな遊具で保育者と一緒に遊ぶ。 ・好きな絵本を読んでもらったり、知っている歌や手遊びを楽しんだりする。 ・春を感じながら草木や小動物に触れ、戸外で散歩を楽しむ。 ・砂場やすべり台など戸外で体を動かして遊ぶ。
	環境構成・配慮	・一人一人の気持ちを大切に受け止めて、安心して過ごせるようにし、子供との信頼関係を築いていく。 ・食事、排泄、午睡などが安心できるよう、ゆったりと温かい雰囲気で生活リズムを心掛けていく。 ・自分の持ち物や片付ける場所が分かるように個々のマークを記し丁寧に伝える。 ・好きな遊びを存分に楽しめるよう子供の興味に応じて遊具や用具を準備する。
	家庭との連携	・「おはよう」のあいさつから一日が始まるよう、家庭でも園でも気持ちよくあいさつを交わし合う。 ・困っている事や不安な事をいつでも一緒に考えていけるよう対話を大切にする。
	評価・反省	

※ここでいう「預かり保育」はP10でいう「時間外保育」と同様の意味

前頁の年間指導計画は一部抜粋であるが、A園では、2歳児の1年間の園生活について、第1期から4期に分けて作成している。様式は、3歳児から5歳児までの年間指導計画と同様である。この年間指導計画に基づき、週日案を作成することになるが、年度ごとに2歳児の受入れ人数は変わること、2歳児の月齢によって発達の差が大きくクラス集団の動きはかなり異なるので、目の前にいる幼児の姿を十分理解して受け止めつつ、週日案を作成することになる。

収集資料2　週日案の様式及び記載内容例

5月第5週（28日から6月1日）（一部抜粋）

実態	戸外遊びでは素足になってどろんこ遊びを楽しんでいる。素足を嫌がる子もおらず、どの子も興味を持って水や泥の感触を喜んでいる。トイレトレーニングが始まり、トイレで成功する姿も見られる。				ねらい	◎保育者と一緒に好きな遊びを楽しむ ◎荷物の片付けや準備を…
日・曜	28日（月）	29日（火）	30日（水）	31日（木）	6月1日（金）	2日（土）
9:00	登園　・荷物の片付け					
10:00	・好きな遊び	☆手形遊び			☆積み木トンネル	
11:00	・戸外遊び	☆段ボールすべり台			☆ベンチからジャンプ	
12:00	弁当・給食		降園	☆カエル・カタツムリ	マット遊び	
13:00	・好きな遊び	☆風船遊び		の色塗り		
14:00	降園					
評価・反省	…クレヨンを足に塗ってペタペタしていたので…					

本週案作成の考え方、手順は以下の通りである。

・週案は、前週の生活、遊びの様子などを実態として記入し、ねらいを立てる。

・2歳児は個人差も大きいため、計画を厳密に立てるのではなく、経験させていきたい遊びや活動を取り上げていくような計画としている。

・保育終了後に保育の実際を加筆し、計画を修正していく。

・評価・反省には、生活や遊びの様子を記録するとともに、幼児一人一人の様子を確認する個人の様子を記録することで、幼児一人一人の理解を進め、クラス全体の動きを予測し年間指導計画の内容を確認しながら、次週の計画を立案する。

<u>収集資料1と2を基に、2歳児クラスの幼児の発達を読み取る試み</u>

週日案の評価・反省欄に保育者が記載した内容を訪問調査で、保育を観察した調査実行委員が読み解き、試みに、以下の観点で抜き出してみると、表17のように2歳児の発達の姿が捉えられると考える。

表 17　週日案の評価・反省の記録欄の記載から捉えた２歳児の姿（一部抜粋）

	Ⅰ期（４月～５月）	Ⅱ期(６月～７月)
幼児の姿	・母親と離れることへの不安があり、泣く。 ・少しずつ好きな遊びを見付ける。 ・自分のマークや園の生活リズムが分かり、少しずつ慣れてくる。 ・言葉やしぐさで自分の気持ちや要求を伝えようとしている。	
保育者との関わり	・担任の名前を覚えて呼ぶ。 ・特定の保育者に抱っこを求める。 ・保育者の真似をして楽しむ（リズムなど）。 ・保育者におんぶを求めたり甘えたりする。 ・自分の要求を言葉で保育者に伝える。 ・保育者の誘いに興味を持ち、落ち着く。 ・食事中に保育者とよくおしゃべりをする。	
自立に向けて	・自分のマークが分かり、自分の物を片付けようとする。保育者に促されてやる幼児もいる。 ・保育者に手伝ってもらい、片付ける幼児もいる。 ・他の幼児がトイレに行っているのを見て、自分もトイレに座ってしようとする。 ・布パンツを履く幼児もいる。 ・お弁当の準備ができるようになり、よく食べる。	
遊びと環境構成	・家庭でも遊んでいるいろいろな玩具で遊ぶ。 （ままごと、車、パズル、人形など） ・粘土、クレヨンの描画、製作、シール、絵具（スタンプ）。 ・戸外で遊ぶ（固定遊具、虫探し）。 ・砂場で遊ぶ。 ・リズム、体操をする。	
友達との関わり	・同じ場にいる幼児に、興味を持ち、近付いて関わろうとする。 ・入園前からの特定の幼児と好きな遊びを楽しむ。 ・玩具の取り合いになる。仲立ちをすると自分の気持ちを言える幼児もいる。 ・楽しそうに食事をする。	
家庭との連携	・大好きなぬいぐるみを預かる。 ・トイレットトレーニングの進め方について、家庭と連絡を取り合う。 ・食事や苦手なものについて、家庭での様子を聞く。	

今回の研究では、提供された資料について観察者が記録を整理したものだが、通年の資料について上記のような視点を持って記録を分析することによって、2歳児の実態を捉えることが期待できると考える。

②個人記録の様式と記載内容例

通常型の幼稚園では、幼児の記録をとっていることが多い。その記録から2歳児の思いを読み取り育ちを把握するだけでなく、幼児に対してどのような願いや思いを持って保育に関わっているかを読み取ることができた。個人記録の様式としては、全体の様子を把握できる一覧表の様式と、一人一人の幼児理解と育ちの確認をする個人記録の2種類に分けることができた。

収集資料3　幼児全員の記録（1週間の幼児の記録）の様式と記載内容例（B 4版）

<クラスの幼児一人一人の様子の記録　5月28日～6月1日>（一部抜粋）

名前	誕生月	28日(月)	29日(火)	30日(水)	31日(木)	6/1(金)	備考
A	6月			何度も「おしっこ出た」と言ってパンツを脱ぐ。(失)(成)　※			
B	9月						
C	12月	友達に「ダメ」と言われて、じっとにらむ。(成)　※	休				
D	6月						
E	1月					休	
F	2月						
G	4月		お弁当を残す。最後におにぎり、頑張って食べる。(失)(成)　※				
H	6月	休					
I	9月						
J	12月			段ボール家に新聞のカーテンを付ける。他の子が全部取っていき怒る。(失)(成)　※			
K	9月						
幼児が楽しんだ遊び・メモ　など		シール貼り	風船 新聞カーテン	(雨)　風船 段ボール	段ボールで遊ぶ（皆で入る）	段ボール	木曜より、水筒持参

※　記載例の中の(失)(成)の印は、排尿のタイミングの失敗と成功を意味している。

毎日の保育の中で、一人一人の幼児がどのようなことをしていたか、保育者が気付いた様子や幼児の言動で心に残ったことを簡略に記録していた。これによって、2歳児一人一人の動きの概略が分かり、一週間の全員の様子を把握できるようになっていた。

また、最下段には、その日、幼児がよく遊んだと思われる遊びの名前と様子を記載し、備考欄に、その週に始まったことや園での生活について保護者に連絡したことに関する覚書等が記載されていた。

収集資料4　月ごとの個人記録の様式と記載内容例

A幼稚園では、上記のクラス全員の様子を一覧表に記録するだけでなく、幼児の園生活の様子をP44の収集資料4のように、1か月ごとに、一人一人の生活の様子を振り返り、幼児の言動から思いを受け止めたり、育ちを確認したりして幼児理解を深めるとともに、ねらいと照らして育ちを確認し、次の月の保育の方針を記載していた。そして、クラスの担任は、翌月における保育の方針を考え、クラスの保育補助をするチームの保育者と共通理解していた。

収集資料４　個人記録の様式（Ｂ５版）及びＡ児に関する記載内容例（一部抜粋）

名前		保　育　の　記　録		担任氏名 ○○○○
○年○月○日　生まれ				
１　学　期　（４月～７月）				
	４　月	５　月	６　月	７　月
ねらい	◎新しい環境に慣れ安心して過ごす ◎保育者に見守られながら自分の好きな遊びを楽しむ。	◎園生活のリズムに慣れ、保育者に手伝ってもらいながら簡単な身支度をしようとする。 ◎楽しい雰囲気の中・・	◎水に慣れ、友達や保育者と一緒に泥遊びや水遊びを楽しむ。 ◎友達とのぶつかり合いを通して、・・・。	◎尿意や便意を感じ、自らトイレに行き排泄する。 ◎衣服の着脱を保育者に見守られながら、・・
記録	・自らトイレに行き便器に座る。排泄に成功することも多い。 ・いろいろなことに興味を持ち積極的に参加し、「なんで」「どうして」と問うことが多い。など	・保育者が細かくしたり食べさせたりすると給食を完食する。苦手な野菜も口に入れることができる。 ・排泄の成功が増え、布パンツで過ごす。など	・玩具の取り合いになり、友達をかむ。保育者の仲立ちで謝り、理由を言葉で伝える。 ・顔に水がかかっても嫌がることなく水鉄砲や水笛を楽しむ。	・朝の片付けを嫌がるが、友達の荷物が残っていると気付き、手伝ってあげる。 ・パンツをはくことを嫌がってそのままズボンをはくことが多い。

<u>収集資料４を基に、２歳児の一人一人の育ちと保育の配慮点を捉える試み</u>

クラスの全員の記録から、保育者がどのようなことに配慮しながら保育を展開しているか、保育者の記録を見てみると、１学期には、排泄、食事、身支度、幼児の思いの伝え方、周囲の幼児や遊びへの興味・関心等について書かれていることに気付いた。そこで、それらの記述を分析してみたところ、排泄に関する記載内容については、図 18 に示すとおりであった。

こうした記録を読み取ると同時に、丁寧に観察し聞き取りをすることができれば、通常型の２歳児保育における幼児の園生活の実情や２歳児の発達の過程、保育の留意点などを明らかにすることが期待できると考え、今後の課題としたい。

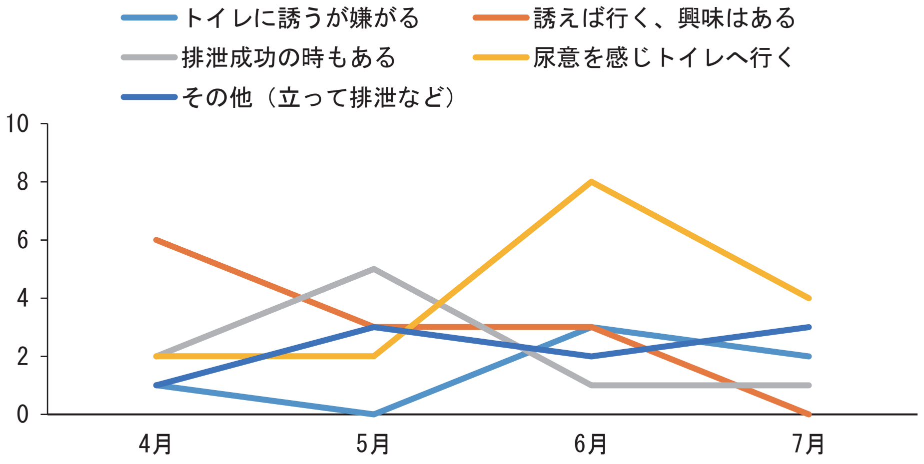

図 18　クラスにおける各月の排泄に関する記録の度数

（4）連絡帳の記録を基に、保護者との連携の在り方を考える試み

保護者との信頼関係を構築するには、2歳児の保育者と保護者がともに幼児を育てるという意識を持つことが大切である。このため、各園では、園便りや連絡帳、または活動への参観や参加、個人面談など様々な機会を使って、保護者との連携を深めることを積み重ねている。

通常型のB園では、連絡帳を活用して保護者との連携を密にし、子育て支援や家庭の教育力の向上につなげている。その連絡帳のやり取りに関する資料を一部収集することができた。

これらの資料から、保護者との連携の内容や方法の参考とすることもできるが、さらに読み取りを深めて、保護者とのやり取りの記録を基に、保護者が求めていることや、不安に感じていること、また、保育者が保護者に伝えたいことなど連携の内容や方法について探ることができると考え、以下のような分析・考察を試みた。

収集資料5　保護者と保育者の連絡帳の内容例「食事の時間、苦戦しています」

4/17	保育者	今日は、給食を同じテーブルで食べました。ちくわを手拭きタオルに包んで食べようとしています。「フォークで食べようね」とお話ししています。おうちでは、どんなふうに食べていますか？
4/18	保護者	食事、最近は家でも苦戦中です。後半になってくると、フォークを持たせるだけでも、「もういい」と席を立とうとしたり遊びだしたりするので、ぱぱっとこちらで食べさせて終わってしまうこともしばしば・・・・・。根気強く頑張ってみます。
4/18	保育者	まだまだ集中力が短い時期です。食事の後半に入る前に切り上げるのも一つの方法かもしれないですね。今日は焼きそばだったので、あっという間に食べられて、本人も誇らし気でしたよ。いろいろやってみましょうね。
5/8	保育者	今日はパスタがなかなか進みませんでしたが、「一緒に食べよう」と私が席の隣に行くと、パクパク食べてくれて、なんと完食。皆に「すご～い！！Ｂちゃん」と褒めてもらい、とっても嬉しそうでしたよ。本人のやる気スイッチを丁寧に見付けてあげることを大事にしてあげたいと思います。
5/9	保護者	完食、私も嬉しいです。やる気スイッチ・・・そうですね！ついつい指示とか「根くらべ」になりがちなので。切り替えや共感からスイッチを見付けてあげたいです。
5/9	保育者	親は頑張ってほしいので、どうしても、そうなってしまうのは仕方ないものです。Ｂちゃんとママの笑顔の時間、一杯つくってくださいね。○○先生（※保護者のこと）なら大丈夫です！
5/10	保護者	ありがとうございます。とにかくかわいい時期なので、たっぷり楽しみたいと思います！

保育者が、園での幼児の食事の様子から課題を感じ、保護者にも関心を持ってほしいと投げ掛けると、保護者は家庭でも食事面を意識するようになっている。しかし、かえって保護者は我が子の食事の仕方に対し力を入れ過ぎて子供は抵抗をしている。保育者は、保護者に「やる気スイッチを丁寧に見付けることが大切ですね」と、本人の意思の芽生えをどう見付け引き出すかを表す言葉で伝えている。このように、保護者が、新たな方法に向かい子育てを楽しみたいという気持ちになるような言葉掛けが大切であると感じた。

収集資料５から、保護者と保育者との連携の内容を読み取る試み

収集した資料（2 歳児Ｂ児の連絡帳・4 月から 5 月末まで）から、特に保護者が気に掛けている内容を事例として取り上げ、保育者と保護者の双方が共感を高める保護者支援の在り方について考察することを試みた。具体的には、Ｂ児の入園当初における 2 か月間の連絡帳の内容を「保育者の気付き・幼児の様子・保護者の気付き」の視点から時系列で分析した。その分析結果に基づき、保護者が何を感じ、何を伝えようとしているのか、その結果、幼児がどのように成長したか、三者の姿と援助のカテゴリーを捉え、保護者と連携を深めるために必要な要因について検討し、保護者支援の在り方について明らかにする試みの例を以下に示す。

表 18　2 か月間の連絡帳の記載内容を時系列で分析した内容

日	保育者の記載と気付き	幼児の表情や内面	保護者の記載と気付き	連携に必要な要因
4/4	給食徐々に食べられれば大丈夫		鼻水が気になり給食の量が心配	気持ちに触れる
5	タンポポ摘み・綿毛を吹く		家で歌を歌っている	遊びを通してのその子の興味を伝える
6	笑顔・鼻水なし 園でも笑顔いっぱい	笑顔 どんどん笑顔	朝からノリノリ・歌を歌う	子供が家庭や園で見せる姿の共通点に触れる
9	石を見つけて嬉しそう		石が宝物	表情　興味
10	タンポポ・ビービー豆 宝物沢山・クラスに慣れ とても嬉しそう			
17	給食をフォークで食べようね		フォークを持たせるだけで、もういいと席を立つ	課題を共有する 課題
18	集中力が短い期間 焼きそばはあっという間に食べた　誇らしげ	誇らしげ	根気強く頑張る 食事がだらだらしないようにやってみる	子供の変化を伝える（誇らしげ）
25	ゆったりしたリズムで過ごし表情が柔らかい 好きな遊びを見付けて意欲的・給食も意欲的に食べる	安心 生き生き	風邪・鼻水・薬服用 午睡ができて安心 咳が落ち着く 心配かけました	健康状況の把握と心遣い 安心 成長を伝える
5/2	トラブルの場面で泣いている子によしよし			子供の成長や喜びに共感する

7	楽しい連休よかった Ａちゃんのペースに合わせて頑張る		連休中お父さんとの遊び トイレのタイミングが合わない	保育者の反省や方針も伝える 意欲付け
8	パスタ進まず、保育者が隣の席に行くと完食。 褒めてもらい嬉しそう。	やりたい気持ち	指示とか根比べが多い。 切り替えや共感から、やる気スイッチを見付けてあげたい	保育者の関わりから、子育てへのアドバイス（励まされる言葉） 子育ての喜びを感じ、前向きな姿勢を持つような言葉掛け 子育ての喜び
9	やる気スイッチを丁寧に見付ける ママの笑顔の時間いっぱい作って		可愛い時期・たっぷり楽しむ	
10	自然の中のＢちゃんの様子。生き生きしている表情もやわらかい。よかった。 喜び	自然が好き 生き生き 柔らかい表情	メダカを飽きずに見ている。いつもポケットに石や草花を持っている。 外遊び好き	子どもの変容やよさを伝える その子らしさの発見 成長を喜ぶ
21	初「ひよこ」嬉しい		朝「ひよこ組行こうね」と言う。「ひよこ」という言葉を初めて聞いた。	発達への理解

収集資料５からの考察と課題

・きめ細やかで具体的な生活や遊び、その子の興味・関心などを伝えることで、保護者は安心し家庭の様子もあるがままに伝えようとする。互いのやりとりの中で、互いが心を開き信頼関係を構築していく。

・２歳児は全ての行為や思いが言語化できない時期でもあり、表情やしぐさや行為を通して表現する。この身体性の高い行動からもその幼児の気持ちを読み取り、保護者に伝えることで、家庭での行動とのつながりや行為の意味が理解できる。

・園での様子を発信し、保育の中でこのようにしたらできたというような具体的な例を伝えることで、保護者が意欲的に家でもやろうとする気持ちになる。

・課題を共有し、焦らずゆっくり進めていくことを認識しながら、成長を喜び合う内容が保護者のいら立ちや焦りを抑制することにつながる。

・保育者の温かいまなざしを感じる柔らかな表現が、保護者の心を安心させる。「やる気スイッチ」など、保護者の心が動くような言葉も効果的である。

・収集資料５から、連絡帳を通して、連携に必要なカテゴリーを見出しているが、まだ、実践半ばで十分な整理ができていない。現段階では、表情・興味・課題・安心・意欲付け・子育ての喜び・その子らしさ・発達への理解が挙げられている。

このように、保護者と保育者が思いを伝え合う連絡帳を分析・考察することによって、連絡に必要な要因などをカテゴリーとして追究することができると考える。今回は限られた数の資料だが、多くの記録を収集することができれば、保護者の幼児の成長への理解や共感を高め、親として成長する機会を提供するためのヒントになると考えられる。

（5）訪問調査のまとめ

訪問調査協力園10園に、研究実行委員2名が訪問し、2歳児保育の実践を観察し、幼児の遊びや生活の様子や育ちの様子の現状を捉えた。毎日通園する通常型と週何日か参加する特別型における幼児の活動の様子や保育の展開等の内容は以下の通りであった。

【2歳児の受入れ（保育）の体制について】

①　保育日数については、毎日通園する通常型と週何日か参加する特別型があった。

2歳児保育の日数は、週1日から5日まで園によって様々であった。

週5日実施している園の中には、全幼児が毎日出席している園（通常型）が7園あった。また、曜日によって出席する幼児が異なる園（特別型）が3園あり、一人の幼児は週のうち1日から2日出席していた。

保育日数の設定については、子育て支援として毎日実施している園、2歳児の発達や体力を考慮し週2日実施の園、2歳児の親子が少しでも多く幼稚園での活動を経験できるように週1日登園のグループを週4日開設している園などがあった。

②　保護者が我が子の育ちを考慮して、保育日数や保育内容を選択できる工夫があった。

通常型の園の中には、保護者等の要望によって週に3日出席のコースを設定している園が2園あり、週5日通園する幼児と週3日の幼児を一緒に保育をしていた。また、他の保育室で、週1回の特別型の保育も行っている園が2園あり、保護者の希望により、年度の途中から特別型から通常型にコースを変更できる設定の園もあった。このように、保護者が我が子の育ちに応じて2歳児保育の日数や内容を選択できる工夫があった。

③　保育時間は、通常型と特別型で異なり、1時間半から5時間程度と幅があった。

保育時間は、特別型は、1時間半から2時間半程度で、通常型は5時間程度、一時預かり事業を実施する2園は、8時間以上であった。

時間外の保育（在園児の預かり保育と同様の時間で、以降は「預かり保育」と表記）の降園時刻は、特別型の1園が14時、通常型は、ほとんどが18時から18時半であった。また、預かり保育は、就労支援が必要な幼児のみ対象としている園もあった。

④　クラス編成は、通常型が1クラスから2クラス、特別型は3クラスから8クラスに編成していた。

通常型は、5園が1クラスで幼児数は5名から20名、2園は1クラス25名と39名であった。なお、39名のクラスは、大きな保育室を2つに区切り、幼児を2つのグループに分けて副担任がそれぞれに保育を展開していた。

特別型の園では、3クラスから8クラスで、幼児数は、1クラス8名から15名であった。

⑤　保育者は1クラスに3名程度で、保育者一人に対する幼児数は4.5人から6.3人であった。

ほとんどが1クラスに3名の保育担当者がおり、2歳児5名から6名に対して、一人の保育者が配置されており、一時預かり事業の実施園においては、規定を満たしていた。

⑥　保育の中心となっている保育者は、幼稚園教論免許と保育士資格を併有していた。

保育担当者の多くが、幼稚園教論免許と保育士資格を併有していた。わずかではあるが、免許・資格はなく、子育ての経験者として保育の補助的な役割を果たしている人もいた。

⑦　2歳児の保育を専門に担当している保育者が多いことが推測された。

訪問調査協力園10園のうち、8園が2歳児の保育を専門に担当していた。一方、年度ごとに他学年の保育者と一緒に担当学年が変わっていたのは2園であった。そのうちの1園は、保育所の経験者を採用し、3、4、5歳児の学級担任を1年ずつ経験させてから2歳児を担当させていた。また、2歳児の保育を担当する保育者は、保育所での勤務経験がある人や、当該園で教員を経験し、育児のために退職した人が復帰している例もあった。自園の幼稚園教育とのつながりを理解し、円滑にする重要な視点であると考えられる。

⑧　2歳児の育ちに配慮した、2歳児専用の園舎や保育室、遊具や用具を整えていた。

2歳児専用の園舎や保育室があり、2歳児の背丈にあった靴箱やロッカー、手洗い等が設えられている園が多い。トイレは室内にある場合と保育室外で、他の学級と共有の場合があり、いずれの場合も保育者が付き添い、排泄の援助（介助、見守り等）をしていた。

また、保育室の環境は、2歳児にとって興味のある遊具や教材（パズル、乗り物、人形、ぬいぐるみ、粘土、絵本等）が設定されており、自分で遊びを見付けたり、簡単なごっこ遊びを楽しんだりできるように、遊び始めの環境設定を丁寧に行っていた。

【保育の内容・方法について】

①　安心して過ごせる場所であることがゆっくりと分かっていけるように、母子分離は段階を踏んで行われていた。

初めは親子で一緒に過ごし、徐々に、幼児が落ち着いたら保護者は帰るなど、母子分離を段階的に行ったり、その幼児に合わせて行ったりすることに十分時間をかけている様子が伺われた。特別型の園では、登園後、親子で身支度を行い、自分の好きな遊びややりたい遊びを見付けて遊び始めるようにしていた。保護者や保育者が側にいることで安心して遊び始める幼児が多いが、慣れてくると、保育者の援助を受けながら自分で身支度を行うようになっていく姿があった。

②　保育内容は、好きな遊びの時間と皆と一緒に行う時間があるが、それぞれの活動はいずれも2歳児の育ちに合わせて短時間であった。

好きな遊びの時間には、目に付く遊具等に触れたり保育者の側にいたりすることで安心している幼児もいる。また、他の幼児の動きが遊び出しのきっかけとなり遊び出す姿もあった。

集合して皆で行う活動では、挨拶と返事、歌や手遊び、散歩や絵本の読み聞かせ等であるが、10分から15分程度の比較的短い時間で行われている。それぞれの活動の節目にトイレ、手洗いの個別指導があり、全員がそろうまでに時間がかかっていた。

③　保育の展開は、一人一人の育ちに丁寧に対応した保育を大切にしていた。

担任と副担任2名で保育をしている園もあれば、保育をリードする役割1名とそれを補

助する役割1名、もう一人は個別対応をする役割1名の3名で保育を進める園もある。例えば、トイレの付き添い等個別の支援が必要な場合は、全体を見守る役と個別対応の役を分担している。それぞれに役割意識が高く、細やかな打合せや声掛けをもとにチームで幼児一人一人の育ちに丁寧に対応した保育が進められていた。

④ 2歳児は、生活全般に個別対応が求められる場合が多いので、安心して過ごせる場所、環境を用意することを重視していた。

通常型の園では、保護者に代わる保育者の役割は大きく、幼児が「保護者がいなくても大丈夫。安心できる保護者以外の大人（保育者）がいる。園は、自分のやりたいことができる楽しい場所、同年齢の幼児がいる場所」となることなどを重視していた。

また、特別型では、「保護者と幼児が共に幼稚園生活に慣れていくこと、無理のない母子分離をすること、保護者の子育てに対する不安の解消を図ること、保護者が幼児への関わり方を学んでいくこと」などを重視して保育を展開していた。

⑤ 保育者間の連携が密に行われていた。

保育者間の連携は、幼児一人一人の思いや言動の受け止めに関する連絡帳などの他、例えば、トイレの指導方法の確認に関する保育者間の相互理解を助けるための掲示板の工夫などがあった。保育者は、今日の一人一人の排泄の回数や自立の状況を示す表示を見て、指導の仕方を考えることができるようになっていた。

また、昼食や午睡に向けての準備などについては、補助的な役割の保育者が、リーダー的な役割を果たしている保育者とのアイコンタクトや、幼児の様子から保育の流れを見通して動く姿が多く見られるなど、どのクラスでも、連携が密に行われていた。

⑥ 年間指導計画や月、週の計画を立てて保育が実践され、評価・反省が行われるとともに、保育記録や個人記録がつけられていた。

2歳児の育ちに添った保育を実践するために、年間指導計画を立て、それを基に月案や週案を作成し、保育の準備をしていた。実践後は反省・評価を行い、保育記録とともに個人記録をつけ、個人面談の折に活用したり、保護者に渡したりしている園もあった。

【保育に関する工夫や配慮点】

① 昼食は、自園給食、外部搬入があるが、保護者の希望で弁当持参を選択できる園もあった。また、保護者が作る弁当持参の日を設定している園もあった。

給食は食べ方や食べる量等、個別の援助が必要であるが、徐々に慣れてくると、自分で食べられるようになる。アレルギーについては、保護者と相談の上、弁当を持参している場合や市町村が定める生活管理指導票を提出させて給食を提供している園もあった。強いアレルギーがある幼児は、他児の弁当と混ざることがないようにするため、机を別にし、保育者が付き添って食事をさせるなどの工夫をしていた。

また、自園給食、外部搬入の園であっても、週のうち1日は弁当を持参する日を設けて、保護者の子育てへの意識付けを行おうとしている園もあった。

特別型の園で預かり保育を実施している園は、弁当を持参させていた。

②　多様な保育の運営に対応した確実な出席管理の工夫をしていた。

日によって異なる出席者の人数管理は複雑になる。例えば、通常型の（週５日）と特別型（週３日）の幼児が一緒に生活する園では、全員出席の日と通常型の幼児だけの日があり、出席者数が異なる。さらに、預かり保育を受ける幼児と定時で降園する幼児、昼食に弁当を頼む幼児等の人数が日によって異なる。これらを間違いなく実施するため、園では曜日ごとの出席予定者の一覧表に預かり保育、弁当、園バス利用者などを加え、分かりやすくまとめて保育室内の目に付きやすい場所に掲示していた。

欠席等があればそれぞれの数に変更が生じるので、毎朝、保育室では、幼児を視診した後、クラス担任と補助者全員で、幼児の出席状況と降園までの人数や準備等の段取りを確認していた。また、迎えに来る保護者や預かり保育の予定変更等に関する連絡事項は、降園時刻までには、全園児の一覧表を職員室でまとめて各保育室に伝えられ、保育者同士で確認しながら降園させていた。幼児たちは安心した様子で降園しているが、こうした緻密な連絡や確認作業が行われている実態を見ることができた。

各園が、幼児の成長・発達の状況や保護者の考え方に応じて多様な対応をするためには、こうした出席や安全管理の工夫が重要になると考えられる。

③　安全管理や防災計画などについては、ほとんどの園で工夫して実施していた。

訪問調査協力園のほとんどが、安全に関する計画を持ち、2歳児が不安にならないように配慮しながら、避難訓練を実施していた。

保育室に防災頭巾を用意し、被り方の指導している例もあり、3歳児以上の幼児が行う避難訓練に段階的に参加する等の取組もあった。また、通常型の園の中には、2歳児も全て避難計画に入っており、年度当初から2歳児に応じた内容が計画されていた。さらに、2月に計画している防災訓練においては、近隣の高校生が2歳児を一人ずつ抱いて避難する訓練を実施している園もあった。

④　子育ての不安解消や、親育ち支援を大切にし、地域の子育ての支援の場となっていた。

登降園時の保護者との対話の中で、保護者の問い合わせに応えたり、情報を発信したりしており、保護者の理解を得ている園が多かった。

特別型の園では、登園日は少ないが、保護者同士のつながりが生まれやすい。そこで、ある園では、子育ての経験が異なる保護者を同じクラスにし、子育て経験のある保護者がアドバイスしたり、情報を提供したりする関わりを大切にしていた。これによって保護者同士の支え合いが自然に生まれ、子育てを楽しく感じる場や時間となっていた。

⑤　連絡帳を活用した保護者とのやり取りが、家庭の教育力向上につながっていた。

通常型の園では、保護者と保育者との連絡帳が活用されている園が多かった。保育者が幼児の園生活での様子や学び・育ちなどを伝えるだけでなく、保護者の思いを丁寧に受け取り、保護者から発信される家庭での幼児の様子や変化等を喜び、共感している様子が読み取れた。こうしたことを通して、保護者も我が子の育ちを喜んだり、読み取る視点に気付いたりしていた。これが親育ち、家庭の教育力の向上につながっていると考えられる。

Ⅳ　研究の成果と課題

1　成果

質問紙調査から、全国の幼稚園において、どのような2歳児の受入れや子育て支援が行われているか、具体的な保育日数や保育方法・内容などの現状と課題を検討した。また、訪問調査からは、多様な考え方や形態で行われている2歳児の受入れの実践の様子及びその中で2歳児がどのように遊びや生活を行っているか実像が捉えられた。

二つの調査から、各園で行われている2歳児の受入れは、実に多様な考え方や具体的な方法があることが分かった。全国各地で多様な実践があることが、「幼稚園における2歳児の受入れ」に関する現状である。各園が、2歳児の受入れについてどのように受け止め、今の制度の枠組みの中で、どのように行っているかをまず示し、今後の在り方について触れてみたい。

⑴　2歳児の受入れには通常型と特別型があり、保護者が子供の育ちに合わせて保育日数や内容を選べる工夫がされている。

2歳児を毎日通園させている園（通常型）もあれば、2歳児の発達や体力を考慮し、週1日から2日が適切と考えて保育日数を設定している園（特別型）もあった。また、通常型の園の中にも週3日出席のコースを並行して設置するなど、保護者が我が子の発達を考慮し、幼稚園という集団での生活のスタートを保護者自身で選べるようになっていた。

質問紙調査の結果、保育日数は、2週間に1回の園もあれば、週1日から6日の園があり、その半数の園で週5日、平均保育時間は約5時間であった。このことについて、訪問調査協力園10園を見てみると、「通常型」は7園で、「特別型」は3園であったが、運営体制について多様な実施形態があることが分かった。

保育日数をどのように決めているかについては、幼稚園教育への円滑な接続や就労支援、子育て支援を目的に毎日保育している園もあれば、2歳児の発達や体力を考慮し、週2日保育している園もあった。また、2歳児が少しでも多く幼稚園での体験ができるようにするため週4日開設するが、職員構成や保育室等の関係で受入れ人数等に制限があり、1組の親子が登園する日は1日とし、8クラス編成（1日2クラス）している園など、様々であった。

⑵　親子の関わりや愛着形成に着目した保育や一人一人の幼児の発達に応じた生活習慣の自立を目指す保育など、2歳児にふさわしい生活の展開に向けて多様な工夫をしている。

保育時間は、通常型は4時間半から5時間程度で、特別型はおよそ1時間半から2時間半程度であった。

保育の内容について、通常型の園は、2歳児が思い思いの遊びを楽しむことを中心にしながらゆったりとして水分補給をした後に絵本の読み聞かせをしたり、園庭に出て遊んだ後にトイレや手洗いを済ませて水分補給やリズム遊びなど行ったりし、昼食後に午睡をしていた。

特別型の園では、親子で一緒に好きな遊びをしたり、保育者と一緒に遊んだりしながら、徐々に母子分離を丁寧に進めていく方法や、年度の後半から保護者と離れて活動する保育に移行したり、クラスを統合して集団を大きくしたりするなど、幼児の育ちに合わせ

た運営を工夫していた。

通常型と特別型の保育の展開は異なるが、いずれの園においても一人一人の幼児に応じた関わりが重視され、母子分離・愛着の形成、生活習慣の自立等を重視しながらゆったりとした雰囲気の中で保育が展開されていた。

保護者にとって、こうした多様な方法で保育が進められる様子を見たり、我が子の成長に気付いたりすることで、子育ての方法を学ぶことにつながり、家庭の教育力を向上させることにつながると考える。それゆえに、2歳児の育ちと保護者の子育て観を尊重した方法、時間設定が工夫されることが重要であり、多様性が求められると考えられる。

⑶ 2歳児専用の保育室、遊具や用具を整え、2歳児にとって居心地の良い環境を用意することが大切である。

質問紙調査の結果から2歳児が安心して過ごす環境として、専用の園舎や保育室があり、2歳児の背丈にあった机や椅子は準備されているが、トイレや手洗い等は5割程であった。2歳児専用の備品は用意されているが、施設や砂場、園庭の固定遊具など、2歳児にふさわしい環境としては、十分には整っていない実態が明らかになった。

訪問調査協力園の中にも、保育室が現在建設中の園や、増築の関係でトイレが保育室とつながっていない園もあったが、現在ある施設に補助の台を置いたり、使い方を工夫したりすることで、安全で2歳児が生活しやすい環境を整えていた。

また、保育室内の環境については、2歳児が興味を示すパズル、乗り物、ぬいぐるみ、粘土等の遊具や教材や、手触りの良い布製の遊具や指先を使う教材などが目につきやすいように置かれ、2歳児が何気なく触れたり、棚から遊具を出したりして遊ぶ姿も見られた。

こうした2歳児が安心して過ごす環境整備について、2歳児の生活のしやすさを考えた工夫をすることが求められる。

⑷ 2歳児の保育を実施するに当たっては、2歳児の保育と満3歳児からの教育課程との関連付けが重要である。

質問紙調査で、長期指導計画や週案・日案等の作成や記録の作成状況については、通常型が特別型より実施されており、2歳児の発達に合わせつつ、他学年と同様に計画的に教育活動を展開している園が多いことが分かった。

通常型の園において、P40からP44に示すように、2歳児の保育について指導計画が作成され、実践後の保育の振り返りや幼児の記録が作成されている例があった。

また、特別型の園の中にも、4年間の教育課程と考えている園があった。この園では、2歳児の発達と親子が共に過ごす生活とのバランスを考え、週2日の園生活を楽しみ、3年保育の3歳児学級への入園につなげていた。この視点で4年間の教育課程と考えると、2歳児の教育日数が3歳児以上と異なることになるが、新しい発想の教育課程ということもできるし、現在の教育課程の概念に当てはめるとすれば、新幼稚園教育要領が示す「全体的な計画」の考え方を生かして実施していることと考えられる。

2歳児にふさわしい生活の展開の観点から、幼稚園教育へ円滑に接続するためには、2歳児の発達や幼児期の育ちの見通しを持った教育課程や指導計画について、園としての考え方を確かなものとし、全体的な計画を作成するなど、2歳児の保育と教育課程とを関連付けて考えることが重要と考えられる。

⑸　2歳児の受入れ方の工夫は、クラス運営の視点と幼児一人一人への保育者の関わりの質の視点から考える必要がある。

通常型の園において、受入れ時期の考え方も多様なことが訪問調査の結果から分かった。満3歳児学級を設置している幼稚園では、2歳児は学齢として考えると満3歳児と同じ学年に相当するので、4月に2歳児受入れと満3歳児入園を同時に行い、一緒に保育することが多いと考えられる。2歳児が誕生日を迎えた時点で満3歳児に学籍を作ればそのままの集団でスムーズに進むという運営の視点である。一方、定員に空きがあって随時受入れている園では、クラスの幼児がおおむね落ち着いたところに新しい幼児が入る方が、当該幼児に十分対応できるという保育者の関わりの視点からの工夫があった。

なお、一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）を実施している園の中には、就労支援の目的に照らして満2歳児になった時点から受入れ、幼稚園児とは別に保育を行っている園もあった。満2歳児になってすぐに入園する幼児がいる場合には、更に個人差が大きくなるので、保育の展開に留意が必要と考えられる。

⑹　2歳児の保育においては、保育者間、保育者と保護者の連携が重視され、有効に機能していた。保護者と子供の育ちを共有することは保護者の育児不安の軽減など、子育ての支援につながる。

質問紙調査で、保育者同士の連携、養護、保護者との連携への配慮が重視されていた。これらは言葉で表現できない2歳児だからこそ、幼児一人一人の思いや育ちの状況を保育者が読み取り、互いに伝え合い確認しながら保育を進めていく姿であると考える。

通常型の園における具体的な姿としては、一人一人の2歳児の成長・変化を、保育者同士が言葉で確認する姿もあったが、幼児の排尿の成功や失敗等に関する表示を、言葉を交わさなくても担当の保育者には分かるように保育室に掲示し、一人一人の排尿や休息、水分補給を確認し促すなど、連携を密に行う姿も多く見られた。また、保護者との連携も、分析の事例（P45からP47）で示したような親育てや家庭の教育力の向上につながっており、実践のヒントとなると考えられる。

特別型では、「保護者と一緒に活動する場面を取り入れる」で、保護者と共に2歳児の成長を共有し見守っていくという特徴が顕著に表れていた。保護者と子供の育ちを共有することは、保護者の育児不安の軽減など、子育ての支援につながると考えられる。

⑺　2歳児受入れの成果は、3歳児の園生活の円滑なスタートや2歳児の安心した園生活だけでなく、保育者や保護者の育ちや4・5歳児の育ちなどがあげられる。

質問紙調査によると、2歳児受入れの成果について、全体では「3歳児の園生活の円滑なスタート」「2歳児の安心した園生活」であった。保育が2歳児の発達にふさわしい形で進められていることによるものと考える。また、通常型の園で「保育者が4年間の連続した育ちを見通せるようになった」が多かったのは、長期指導計画や週案・日案等、記録を作成し、2歳児の発達を踏まえつつ、他学年と同様に計画的に教育活動を展開している園が多いことが、4年間の見通しにつながっていると考えられる。さらに、「4・5歳児が小さい子に親切に関わるようになった」という成果が得られたことは、2歳児の受入れが、2歳児の発達にふさわしい保育を提供するだけでなく、幼稚園児にも育ちのきっかけを提供することになっていると言える。

特別型の幼稚園では、週1回から2回の保育への参加が、当該園への入園や入園後の「3歳児の園生活の円滑なスタート」につながったと考える。また、「保護者同士の関わりが広がった」が多かったことは、保護者と一緒に過ごす活動が多い特別型の特徴であり、子育てや親育ち支援や、家庭の教育力の向上につながっていると考えられる。

(8) 2歳児を指導する保育者は、2歳児保育専任が多い傾向があり、他学年の保育者と十分連携し、保育者間の学び合う機会を十分に確保することが重要である。

訪問調査協力園10園のうち、8園が2歳児担当の専任であった。一方、年度ごとに担当学年が変わっていたのは2園で、そのうちの1園では、保育所経験のある保育者に、3、4、5歳児の学級担任1年ずつ経験させてから、2歳児を担当させていた。

これらのことから、各園においては2歳児専任で担当させ、3歳児以上の保育者とは別の人事構成になっている傾向があると考えられる。2歳児専任にすれば、その専門性の高さによって2歳児にふさわしい生活を展開でき、その積み重ねによってより2歳児保育の質が高まっていくことが期待できる。そして、2歳児と3、4、5歳児の生活が幼稚園の中で共に過ごすことの意味や、幼児が互いの姿から気付いたり学んだりすることの教育的価値を考えたとき、保育者・教師間の連携は重要な意味を持つことになる。

2歳児の担当者を専任にしている園の中には、当該園の元教員経験者が含まれており、園の教育を理解し、接続することにつながっていると考えるが、2歳児担当者と3、4、5歳児の担当者が幼児の発達や教育課程・全体的な計画等について学び合う機会を十分に確保する必要がある。

(9) 多様な保育の運営に対応した確実な出席管理や防災計画が必要である。

月ごと、曜日ごとに、そして降園時刻や通園バスの利用の有無等によって、幼児の出席等の管理は異なり複雑になっている。各園では、幼児たちが安心して幼稚園生活を楽しめるようにするため、多様な保育の運営に対応した確実な出席管理の工夫がなされていた。また、ほとんどの園で2歳児が不安にならないように配慮しながら、避難訓練を実施していた。保育室に防災頭巾を用意し、被り方の指導している例もあり、3歳児以上の幼児が行う避難訓練に段階的に参加する等の取組があった。

また、通常型の園の中には、年度当初から2歳児に応じた内容が計画され、防災訓練においては、近隣の高校生が2歳児を抱いて避難する訓練をしている園もあった。ここまで計画することは難しいが、このような対応に学び、防災計画を地域とともに作成し、地域の協力を得やすくすることも必要と考えられる。

(10) 子育て支援では、楽しさを感じる場や時間となる工夫や、子育て経験のある保護者の活躍の場が工夫され、成果を上げているのは、体験型の活動である。

質問紙調査において、子育て支援の活動で、最も成果があるのは未就園児の親子登園であり、子育て情報の発信については、とても成果があるという割合が他に比べて低かった。各園では、情報発信のために結構な時間を費やしているが、ＳＮＳが発達している今日、保護者は自力で収集できるものも多いので、精選し効率性を高める必要があろう。

訪問調査協力園では、登降園時に保護者に情報を発信したりして連携を密にしていた。また、子育て経験のある保護者の力を活かして保護者同士の支え合いが自然に生まれ、子

育てを楽しく感じる場や時間を作るように工夫していた。家庭の教育力の向上を目指すには、協力園の例のように子育てのヒントやモデルが身近に感じられるような体験型の活動を設定することが有効と考えられる。

また、訪問調査協力園の資料（P45からP47）の中で、保護者と保育者との連絡帳が活用されている。特に通常型の保育者は丁寧なやりとりをしている。こうしたことを通して、保護者も子どもの育ちを喜んだり、読み取る視点に気付いたりしている。これが親育ち、家庭の教育力の向上につながっていると考えられる。

⑾ 2歳児保育については、回答園の3割弱が実施している。また、未実施園のうちの3割強が「必要性あり」と回答しているが、「必要性なし」が7割弱を占めており、園や地域の状況によって2歳児受入れの推進に積極的な園と慎重な園があると考えられる。

質問紙調査の結果では、回答園の3割弱が2歳児保育を実施しており、未実施園のうち、2歳児保育の「必要性あり」と回答したのは3割強で、「必要性なし」が7割弱を占めた。必要性がないと考える理由には、「3歳までは、家庭での経験を多くさせたい」という回答が半数以上を占め、「保護者からの要望がない」が2割弱であった。その他の回答の中には、「3歳未満は家庭教育が重要」や「親子登園や園庭開放で十分」という回答もあった。

このような状況を考えると、2歳児の受入れ（2歳児保育）の必要性については、園や地域の状況によって2歳児受入れの推進に積極的な園と慎重な園があると考えられる。

⑿ 2歳児保育を実施しない主な理由は条件整備が整っていないことであった。

2歳児保育の必要性を感じているが実施していない園の3割強は、「設置者の方針」で、3割が「実施するスペースの確保が困難」、1割が「園の費用負担が過重」と「担当する職員の確保が困難」であった。

これについては、設置者別によって回答が顕著に異なり、公立では「設置者の方針」が8割以上を占めたのに対し、私立においては、「実施するスペースの確保が困難」が4割強で、以下「園の費用負担が過重」「担当する職員の確保が困難」「設置者の方針」の順であり、回答傾向に差が見られた。

2　今後の課題

⑴ 幼稚園における2歳児の育ちと保育の内容の関係を丁寧に見ていく必要がある。

本研究では、質問紙調査で全国の2歳児の受入れの実情を把握することに注力し、実施の形態や運営方法などの面が中心であった。訪問調査協力園における実際の2歳児の園生活の状況を観察することができたのは、ほとんどが30年度の後半になってからであった。それゆえに時間の制約があり、2歳児の育ちと保育の内容との関連についての調査は、十分と言えない状況である。

今後の2歳児受入れについて、丁寧な2歳児保育の実態を捉え、2歳児にふさわしい生活が家庭における生活と幼稚園における生活とのバランスがどのようにあったらよいかなど、多様な視点からも考え検討することが必要であろう。

⑵　2歳児の受入れについては、年数をかけて多様な実践事例を検討し、社会的な要望を踏まえながら今後の受入れの在り方を考えていく必要がある。

2歳児の受入れについては、まだ、社会的な要望は不確定な状況であり、ここでまとめた質問紙調査回答園や訪問調査協力園の実施方法が全てではない。発達の個人差が大きい2歳児の育ちや保育の在り方については、特定の形ではなく、多様性が十分に認められる必要がある。

特に、親子の愛着形成、関わりの重視、就労支援の必要性など様々な課題があり、2歳児としてふさわしい生活の展開ができにくくなっている現状を考えたとき、検討すべき重要な課題でもある。そこで、年数をかけて多様な実践事例を検討し、幼児の育ちと保育の関係を見ていき、2歳児の受入れの在り方について考えていく必要があると考える。

⑶　2歳児の受入れ、2歳児保育の質を保障するためには、2歳児にふさわしい生活が展開できるような保育の在り方に関する資料を作成することが求められる。

幼稚園における2歳児の受入れを充実させるためには、2歳児だからこそ大切にしたい保育の在り方に関する優れた実践事例や、2歳児の特性や一人一人の育ちに応じた教育課程や保育内容を示唆する資料が必要になってくる。また、家庭の教育力の向上につながる保育者と保護者の連携の在り方や役割を示唆する資料を作成することも必要であろう。

今回の訪問調査によって2歳児保育の教育課程や指導計画の参考となる資料、保育や一人一人の幼児の記録に関する資料、そして保護者の連携に関する資料を収集することができた。収集した資料の内容やその分析による資料の活用について、P40からP47に示したが、こうした様々な分析・考察を行うことによって、2歳児の受入れを充実させる具体的な方策に関する資料の作成が求められると考える。

3　おわりに

本研究によって、全国の幼稚園において、2 歳児の親子が共に活動することで子育ての知恵や方法を修得できる場や機会の提供を行い、家庭の教育力を向上させる役割を担っている現状と課題が分かった。これは、近 20 年の間に子育て支援の必要性が高まり、幼稚園が、子育ての知恵や方法を伝える形から、子育て仲間が集う場の提供、そして、親子が共に活動することで子育ての知恵や方法を習得できる場や機会の提供へと、教育現場の視点から対応し、進化してきた結果であると考えられる。また、近年の就労支援の必要性の増加により、待機児童数が増加しており、幼稚園の施設や人材の専門性を広げ深めることによって、就労支援の一翼を担っている現状と課題も捉えられた。これらの役割を果たすために、各園は地域の特性や園の規模等の実情を捉えて、実に多様な考え方で内容・方法を工夫しながら実践していた。

このことは、子育て支援や親育ち支援、就労支援という社会の必要から発生している幼稚園への期待と、学校教育を行う施設としての幼稚園が行う 2 歳児保育という教育的価値に関する視点からの問い掛けを、どのように調和的に整理していくかという課題であり、幼稚園教育としての隘路に立っていると言っても過言ではない。

各園における 2 歳児の受入れについて、幼稚園教育の立場から考えると「幼稚園教育への円滑な接続」であるが、通常型の園は、就労支援の役割を担うことができるように設定しながら「幼稚園教育への円滑な接続」を目指していた。また、特別型の園は、子育て支援や親育ち支援という役割を担うことができるように設定しながら「幼稚園教育への円滑な接続」を目指していた。そして、受入れの具体的な内容・方法は、様々な形態や運営方法があり、一つの方法にまとめることはできなかった。できないというよりは、まとめることが適切ではなく、多様な工夫を認めることが前提になければならないように考える。なぜならば、2 歳児の受入れを必要とする保護者ニーズや幼児の発達の状況自体が多様であり、その多様性を受け止めずに在り方を論ずれば、支援としての役割は成り立たないと考えるからである。

しかし、支援だけを優先させれば、2 歳児にふさわしい生活の展開と 2 歳児なりの健やかな育ちが担保できなくなる可能性がある。それゆえに、多様になっている保護者の生き方や就労状況に応じて、保護者のニーズを柔軟に受け止める保育者の力量、多様性を尊重する保育観などが求められると考える。すなわち、多様であればよいのではなく、多様性の重視に当たっては、言葉で表現できない幼児の思いや育ちを的確に理解し、その場に置かれている 2 歳児にとってふさわしい展開となるように保育の質を確保しようとする保育者の姿勢や保育観が基本である。ここにも保護者の多様なニーズと幼児の最善の利益とを調和的に整理し判断する力量が必要となると考える。

資　　　料

【質問紙調査用紙】　　**幼稚園における２歳児の受入れに関する実態調査**

この調査は、貴園の２歳児の受入れ体制やその成果についてお聞きするものです。回答結果は別紙に記した文部科学省委託研究以外の目的には使用いたしません。回答結果は全てコンピュータに入力しデータとして処理され、回答用紙はシュレッダーにかけ廃棄されます。回答された園名等が公表されることは一切ありません。また、回答がない場合でも不利益を被ることはありません。御協力よろしくお願いいたします。

貴園の概要について、当てはまる記号に○を付けてください。（　）には、数字を入れてください。

１．貴園は　　a 国立　　b 公立　　c 私立→・私学助成園　・新制度園（何れかに○）

２．学級数　満３歳児（　　）学級　３歳児（　　）学級　４歳児（　　）学級　５歳児（　　）学級

３．園児数　満３歳児（　　）人　３歳児（　　）人　４歳児（　　）人　５歳児（　　）人〔平成30年9月1日現在〕

４．２歳児のクラス（グループ）を設定して、定期的に保育を行っていますか。あてはまる記号に○を付けてください。

a はい ➡ a に○を付けた方は、問Ⅰにお進みください。問Ⅰ～Ⅳ・問Ⅵをお答えください。

b いいえ ➡ b に○を付けた方は、問Ⅴにお進みください。問Ⅴ・問Ⅵをお答えください。

問Ⅰ　平成30年度の２歳児受入れの体制、運営等について伺います。

１．２歳児の受入れの目的は何ですか。最も重視しているものを1つ選び、その記号を右の欄にご記入ください。　［　　］

a　幼稚園教育への円滑な接続　　b　保護者の育児不安解消のための子育て支援
c　就労支援　　d　家庭の教育力向上　　e　２歳児に必要な体験の提供

２．２歳児の受入れ総人数は何人ですか。………………　［　　人］

３．２歳児のクラス（グループ）はいくつありますか。………………　［　　クラス］

４．２歳児１クラス（グループ）あたりの保育は、週何日実施していますか。複数のクラスがある場合は、最大の数でお答えください。………………　［週　　日］

５．２歳児クラス（グループ）の多くの幼児は、週何日通っていますか。………………　［週　　日］

６．２歳児クラス（グループ）の一日の保育時間は何時間ですか。（※時間外の保育を除く）……　［　　時間］

※「時間外の保育」：２歳児クラスの通常の保育時間外の保育（以下同じ）

７．時間外の保育を実施する場合、何時までですか。………………　［午後　　時　　分まで］

８．２歳児クラス（グループ）を担当する職員について伺います。

（１）２歳児の一つのクラス（グループ）を何人の職員で担当していますか。………………　［　　人］

（２）２歳児クラス（グループ）が複数ある場合は、職員は全部で何人ですか。………………　［　　人］

（３）担当制にし、各職員が担当する幼児を決めていますか。………………　［a はい　b いいえ］

（４）（３）で a はい と回答した方に伺います。職員１人あたりが担当する幼児は何人ですか。　［　　人］

（５）２歳児クラスを担当する職員の免許・資格についてお答えください。

①　幼稚園教諭免許状のみをもっている職員	人
②　保育士資格のみをもっている職員	人
③　幼稚園教諭免許状・保育士資格の両方をもっている職員	人
④　市町村等が行う研修を修了している子育て支援員	人
⑤　その他	人

９．昨年度の２歳児クラス（グループ）から、今年度３歳児学級に入園した幼児は、何人中何人ですか？

［２歳児クラス（グループ）（　　　）人中（　　　）人］

問Ⅱ　２歳児の保育の施設・整備や計画及び内容について伺います。

１．以下のａからｊのうち、２歳児専用に用意している場やものすべての記号に○を付けてください。

ａ　保育室　　ｂ　園庭　　ｃ　砂場　　ｄ　滑り台（含む複合遊具）　　ｅ　机

ｆ　椅子　　ｇ　トイレの便器　　ｈ　手洗い場　　ｉ　ロッカー　　ｊ　床

２．２歳児の保育の計画や記録は、どの程度作成していますか。該当する記号に○を付けてください。

（１）長期を見通した計画（例：年間指導計画）を作成していますか。………………………	ａはい　ｂいいえ
（２）保育の計画（日案あるいは週案）を作成していますか。………………………………	ａはい　ｂいいえ
（３）計画に基づいた保育の記録を作成していますか。……………………………………	ａはい　ｂいいえ
（４）幼児一人一人の記録（例：個人記録）を作成していますか。…………………………	ａはい　ｂいいえ

３．計画を作成するときに参考にしている情報は何ですか。以下の項目から特に参考にしているものを２つ選び、その記号を右の欄に記入してください。

ａ　保育関係の情報誌　　ｂ　保育者自身の子育て経験

ｃ　自園のこれまでの実践　　ｄ　保育所・認定こども園等の他園の実践

ｅ　保育所保育指針または幼保連携型認定こども園教育・保育要領

ｆ　文部科学省から出された資料（幼稚園を活用した子育て支援としての２歳児の受入れに係る留意点について（通知）等）

４．２歳児の保育では、以下の項目について、どの程度重視していますか重視している度合いについて、当てはまる数字に○を付けてください。

項目	とても重視している	少し重視している	あまり重視していない	全く重視していない
① 保育室は２歳児が遊びを選べるよう数種類の遊びのコーナーを設定する	4	3	2	1
② 遊びのコーナー以外に寝ころんだりゆったりしたりするスペースを設定する	4	3	2	1
③ 手や指を動かして遊ぶ遊具・用具を用意する	4	3	2	1
④ 心地よい音質、親しみ易い材質や色合いの遊具・用具を用意する	4	3	2	1
⑤ ２歳児が自分のやりたいことを見付けて遊ぶ時間を中心にする	4	3	2	1
⑥ ２歳児クラスのみんなで楽しむ活動を中心にする	4	3	2	1
⑦ 体を十分に動かす遊びを取り入れる	4	3	2	1
⑧ 周囲の幼児と遊ぶ経験を取り入れる	4	3	2	1
⑨ 自然と触れ合う経験を取り入れる	4	3	2	1
⑩ 絵本や言葉に関する遊びを取り入れる	4	3	2	1
⑪ 歌やリズムを楽しむ遊びを取り入れる	4	3	2	1
⑫ 様々な素材に触れる遊びを取り入れている	4	3	2	1
⑬ 保護者と一緒に活動する場面を取り入れる	4	3	2	1
⑭ 保育者は２歳児とのスキンシップを行う	4	3	2	1
⑮ 遊具・用具等は２歳児の動きに応じて設定する	4	3	2	1
⑯ ２歳児の手が届く範囲の物は、特に安全性を点検し、危険な物は取り除く	4	3	2	1
⑰ 遊具・用具は洗ったり、消毒したりする	4	3	2	1
⑱ 一日の中で、休息や水分補給を確認し、促す	4	3	2	1

項　目	とても重視している	少し重視している	あまり重視していない	全く重視していない
⑲ 食事を始める時間やかける時間は、２歳児一人一人のペースを尊重する	4	3	2	1
⑳ ２歳児一人一人の排尿間隔を踏まえ、排泄を促す言葉掛けをする	4	3	2	1
㉑ 園行事への参加は、短時間（一部への参加）だけにする	4	3	2	1
㉒ 園生活の仕方や約束を知らせる	4	3	2	1
㉓ 物の取り合いなど、トラブルの場面では、保育者はすぐに止める	4	3	2	1
㉔ 物の取り合いなど、トラブルの場面では、２歳児の気持ちを代弁する	4	3	2	1
㉕ ２歳児の思いに共感しながら、それを言葉で表現する	4	3	2	1
㉖ ２歳児の言葉を繰り返し、伝わる楽しさを味わわせる	4	3	2	1
㉗ 一人一人の２歳児の成長・変化を、保育者同士で共有する	4	3	2	1
㉘ 次の保育の展開について、保育者同士で話し合う	4	3	2	1
㉙ 一人一人の２歳児の様子を保護者に伝える	4	3	2	1
㉚ 保護者の様々な悩みを相談できる場を設定する	4	3	2	1

問Ⅲ　２歳児の受入れを実施することによる成果と課題について伺います。

１．以下のａ～ｊの項目で、特に成果があると思われるものを3つ選び、その記号を右の欄に記入してください。

ａ　２歳児が好きな遊びを見付けて遊ぶようになった。
ｂ　２歳児が園生活の流れが分かり、安心して遊べるようになった。
ｃ　３歳児の園生活のスタートが円滑になった。
ｄ　４・５歳児が小さい子に親切にかかわる姿が見られるようになった。
ｅ　２歳児の特性についての保育者の理解が深まった。
ｆ　保育者が４年間の幼児の育ちを見通せるようになった。
ｇ　保育者が基本的な生活習慣の自立を支える援助の在り方が分かった。
ｈ　保育者同士の連携がスムーズにとれるようになった。
ｉ　保護者が２歳児の興味・関心に気付くようになった。
ｊ　保護者同士の関わりが広がった。

２．２歳児の保育を実施していて課題だと思うことはどのようなことですか。特に課題だと思うものを２つ選び、その記号を右の欄に記入してください。

ａ　保育者の２歳児保育の基本的な知識・技能の獲得
ｂ　２歳児の保育と幼稚園教育の関連付け
ｃ　保護者に２歳児の園生活の様子を伝える工夫
ｄ　２歳児保育を実施するスペースが不足
ｅ　２歳児クラスを担当する職員の負担過重
ｆ　園の費用負担（人件費、施設改修費等）

問Ⅳ　２歳児の受入れについての行政からの補助の状況について以下のａ～ｄのいずれかに○を付けてください。

ａ　保育を必要とする子供を受入れる事業（例えば、一時預かり事業（幼稚園型Ⅱ）・小規模保育事業・幼稚園における長時間預かり運営費支援事業等）からの運営費支援を受け実施している。
ｂ　子育て支援の充実を図るための事業（例えば、私学助成（子育て支援活動の推進）等）からの運営費支援を受け実施している。
ｃ　上記　ａの事業　・ｂの事業　どちらからも運営費支援を受け実施している。
ｄ　上記　ａの事業　・ｂの事業　どちらからも運営費支援を受けずに実施している。

★２歳児の受入れを実施をしていない園のみに伺います。

問Ⅴ　幼稚園における２歳児の保育について伺います。

１．２歳児の保育の必要性を感じていますか。…………………………………………　ａはい　ｂいいえ

２．１で ａはい と回答した方に伺います。
それは、なぜですか。当てはまる項目を１つ選び、その記号を右の欄に記入してください。
- ａ　幼稚園教育への円滑な接続
- ｂ　育児不安解消のための子育て支援
- ｃ　就労支援
- ｄ　家庭の教育力向上
- ｅ　２歳児に必要な体験の提供

３．１で ａはい と回答した方に伺います。２歳児の保育を実施していないのはなぜですか。
当てはまる項目を１つ選び、その記号を右の欄に記入して下さい。
- ａ　保育者の２歳児保育の基本的な知識・技能が不十分
- ｂ　設置者（市町村等）の方針
- ｃ　２歳児保育を実施するスペースの確保が困難
- ｄ　２歳児クラスを担当する職員の確保が困難
- ｅ　園の費用負担（人件費、施設改修費等）が過重
- ｆ　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

４．１で ｂいいえ と回答した方に伺います。２歳児の保育はなぜ必要ないとお考えですか。
当てはまる項目を１つ選び、その記号を右の欄に記入してください。
- ａ　保護者からの要望がない
- ｂ　３歳までは、家庭での経験を多くさせたいから
- ｃ　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

★すべての方に伺います。

問Ⅵ　保護者への子育て支援に関する貴園の取組について伺います。

１．２歳児に限らず、子育てに関して、保護者からの相談はどのような内容が多いですか。
主なものを３つ選び、その記号を右の欄に記入してください。
- ａ　食事　　ｂ　排泄　　ｃ　生活リズム　　ｄ　イヤイヤ期
- ｅ　母子分離　　ｆ　発達の遅れ　　ｇ　保護者自身の悩み
- ｈ　保護者同士の関係　　ｉ　家族との関係　　ｊ　就学に関すること

２．貴園が行っている子育て支援の実施状況と成果（保護者にとって効果的な子育て支援になっていると考えられること）について、当てはまる数字に○を付けてください。

項　　目	とても成果がある	ある程度成果がある	あまり成果はない	全く成果はない	実施していない
①　未就園児の親子登園	4	3	2	1	0
②　子育て情報の発信	4	3	2	1	0
③　園庭開放等、親子の居場所づくり	4	3	2	1	0
④　子育て相談	4	3	2	1	0
⑤　関係機関との連携・紹介	4	3	2	1	0
⑥　保護者のリフレッシュのための預かり保育	4	3	2	1	0

御協力ありがとうございました

公益社団法人　全国幼児教育研究協会
03－3239－8066　e-mail:admin@zenyoken.org

付記：
平成30年度文部科学省委託「幼稚園における２歳児の受入れの実施に関する調査研究」
〇調査研究実行委員会の組織　代表　岡上　直子
〇調査研究実行委員会　（五十音順）

実行委員長	岡上　直子	元十文字学園女子大学教授
委　　員	足立　祐子	台東区立竹町幼稚園長
委　　員	岩城　眞佐子	東京都教職員研修センター研究研修支援専門員
委　　員	神谷　美和子	江東区立もみじ幼稚園長
委　　員	黒澤　聡子	特別区人事・厚生事務組合教育委員会事務局主任主事
委　　員	小山　容子	創価大学講師
委　　員	齋藤　有	聖徳大学講師
委　　員	中井　清津子	相愛大学教授
委　　員	中村　香津美	竹早教員保育士養成所専任教員
委　　員	難波　和美	（公社）全国幼児教育研究協会事務局長
委　　員	林　友子	帝京科学大学教授
委　　員	東川　則子	聖徳短期大学准教授
委　　員	宮里　暁美	お茶の水女子大学教授
委　　員	宮本　友弘	東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授
委　　員	山﨑　佳世	由田学園千葉幼稚園長
委　　員	若槻　容子	中野区立ひがしなかの幼稚園長

〇ワーキンググループ（本会調査研究部）

統　　括	岡上　直子	前掲
部　　長	黒澤　聡子	前掲
副 部 長	岩城　眞佐子	前掲
副 部 長	林　友子	前掲
部　　員	足立　祐子	前掲
部　　員	神谷　美和子	前掲
部　　員	小山　容子	前掲
部　　員	中村　香津美	前掲
部　　員	東川　則子	前掲
部　　員	宮里　暁美	前掲
部　　員	山﨑　佳世	前掲
部　　員	若槻　容子	前掲

〇研究協力園
学校法人 滝川学園滝川幼稚園
学校法人 東北柔専　あけぼの幼稚園
岸の里幼稚園
学校法人 大森学園　つしま幼稚園
学校法人 黒木学園　徳力団地幼稚園
学校法人 立華学園　たちはな幼稚園
九州女子大学附属自由が丘幼稚園
学校法人 国際学園　ひばり幼稚園
学校法人 新生学園　鶯谷さくら幼稚園
学校法人 向南学園　向南幼稚園